

---

# とある科学の拒絶反応（アウトラウンダ ）

宮内孝則

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の拒絶反応（アウトラウンダ）

### 【コード】

N6690W

### 【作者名】

宮内孝則

### 【あらすじ】

裏切られ、一度は全てを失った少年は世界に対して『拒絶反応』を示した。

だが、生きていく中で彼の願いは叶えられ、自身も知らないうちに日常を取り戻していく

しかし、運命は彼が平和に生きていくことを『拒絶』し、それを許

すことはなかった

。

魔術と科学とある少年の運命が交錯する時、物語は始まる

## 拒絶反応（アウトラウンダー）

「探せ！ここにあのガキがいるはずだ！あいつを殺っちまわねえと俺らが殺されちまう！」

黒い防弾チョッキとヘルメットで武装した男たちが銃を片手に部屋を荒らし回る。

壁には銃弾の後が幾百発と残る室内で僕は震えていた。

ベッドの下から見える狭い視界には真っ赤な血溜まりが4つ、動かない肢体も同じ数あった。

その時、目の前に黒い影が現れた。

「ひっ…！」

「おい！見つけたぜえ、へへえ。今ぶっ殺してやるから出てこいつて、このクソ ガキい！」

「あ っ、くっ」

男は僕の腕を無理やり引つ張り床に叩きつける。

ビチャ

右手に生ぬるいなにかが当たった。  
見てみれば右手は真っ赤だった。

「ひゃっはははは！こいつ血い見て方針してんぞ！安心しなあ、今

すぐ後追わせてやつからよお！」

男たちが銃を向ける。

「あっ ああっ うあああああ！」

「暑い」

わたくしなぎやくも  
私神風八雲十五歳はいつも通り街をブラブラしていたのだが

「待あてえー！この変態ー！」

と叫ぶ女子中学生に追われているのである。

説明するには約三十分さかのぼる

「暑い」

いつも通り街をブラブラしていた。

6月も半分を過ぎた学園都市はヒートアイランド現象によって多分

30 は余裕で越えてるはず・・・。

「おお！君かわいいじゃん！一緒に遊びに行こーぜえ。帰りは送っ

てくからさあ。」

「まあ、帰りはいつになるかわかんねえけどなあ！ひゃあっはっは  
！」

ビルの2階を繋ぐ通路を歩いていたら一人の女の子を数人の不良たちが囲んでいるのが見えた。

「んあ？あれは確かLEVEL5の」

囲まれている女の子の顔と制服には見覚えがあった。

《あいつはLEVEL5第3位、確か常盤台の超電磁砲御坂美琴レールガンだっけか？》

そこでこのままでは絡んでいる不良たちの命が危ないと察知し、俺は彼らに声をかけることにした。

「はあ・・・おい、あんたら・・・やめとけよ」

俺は少女を助ける風を装って男たちに近づく。

そうでもないかと騒ぎを聞きつけた治安維持部隊 ジャツジメントが現れた時、仲間だと勘違いされかねないからだ。

しかし助けてやるうってのに男たちはこちらを思いっきり睨みつけてきた。

「ああ？なんだてめえ？邪魔すんのかよ」

「いや、さっさと帰った方があんたたちのためかと思っ て、あれ  
？」

男たちに歩み寄るとまったく警戒していなかった足に必殺足掛けをくらってしまった・・・。

体がそのまま前のめりに倒れていく。  
その先には常盤台のエースが……。

むにゅ。

「は？今の効果音は？」

「ひゃっはっは！まぬけ野郎があ！お前がさっさと帰れや」

不良たちが無様に足を引っかけられた俺を笑うが、俺は視界に写る  
<恐怖>によつてそれどころではなかった。

「あ・ん・た・ねえ」

「いや……ちよつと待てよ……今のは故意じゃなくて……」  
御坂美琴の身体が次第にバチバチと電気を帯び始める。

「あの？なにをそんな般若みたいな顔してんの？」

「だあれが般若じゃあぁあ！」

「うおおおー！」

御坂美琴が全力で電気を放出する。

LEVEL5の全力の電撃は彼らを標的にしたものではありませんものの  
不良たちが面白いように倒れていく。

「なんて……考えてる場合じゃねえええええええー！」

とかなんとか言ってたたら電撃が迫る。

ようやく電撃が収まると辺りの信号機と不良たちがスクラップになつていた。

「この 変態！なんであんなだけ平然と立ってんのよ！大体、私にとつちやさっきの奴らなんてなんてことないし！」

「いや・・・善意の結果じゃん・・・。別にお前の胸触ったからって欲情なんかしねえよ・・・。ん・・・？どした・・・？」

御坂美琴の顔が急に真っ赤になつていく。  
ついでになんかバチバチいつてる気がする。

「こおの 変態野郎ー！！！」

「なんだあ！？」

あいつがコインを弾くと収束された電撃が音速を超えるスピードで発射された。

「つたく・・・これだからお嬢様ってのは」

咄嗟に左手を電撃に向ける。

「拒絶する！！」

電磁砲が俺の左手に触れると辺りには粉塵が巻き上がった。

「ふっ・・・」

御坂美琴は勝ち誇つた笑みを浮かべた。

だが俺はかすり傷一つ負つてはいない。

次第に粉塵が晴れ、彼女の姿が視界に映ると彼女は驚きの表情を浮



かべていた。

「まさか・・・私の攻撃を食らって・・・立ってるなんて・・・」  
学園都市LEVEL5の驚いた様子は興味があつたが、周辺に野次馬が集まり始めていることに気づき、俺はその場を離れることにしたのだ・・・が・・・

問題はここからだつた・・・。

「くっ・・・！待ちなさい！この変態男ーっ！！」

まあ・・・、こういう次第でこんな夜中に女子中学生に追われて町中走り回るはめになつてしまったのである・・・。

「いい加減止まりなさい！この変態野郎ーっ！」

時は移つて今は人気のない橋の上。

逃げ回るのに疲れた八雲はとうとう追い込まれてしまったのだ。

「はあ、はあ、ようやく諦めたわね、覚悟しなさい！」

御坂美琴が八雲に向かってコインを構える。

先ほどと同じ構え・・・。

だが、八雲は動じることなく煙草を取り出し火を着ける。  
追い詰められた悪役にしては余裕尺尺といった行為だろう。

「あんた、嘗めてんの？私の前でんな真似してんじゃないわよー  
！」

学園都市第3位の指から必殺のレールガンが再び放たれた。

「 を拒絶する。」

だがまたもや八雲の言葉とともにレールガンが消滅する。

「ふうー、LEVEL5の超電磁砲レールガンは無能力者にも容赦ねえのかよ。」

「まったく！なんであんたはさつきから私の能力が効いてないのよお！」

もう一度同じ攻撃が繰り返される。

「だから、俺は無能力者だったの！」

八雲は再びその攻撃を受ける。

と同時に電磁砲を御坂美琴に向かって反射させた。

「へっ？」

反射されることを予測していなかった美琴は反応できずに立ち尽くすしかなかった。。。

(やばっ・・・、死んじゃう・・・っ！)

彼女は目を閉じる。

だが、

その攻撃は彼女に届くことなく消滅した。

「へっ・・・？なんで・・・？」

目を開けた彼女は何が起こったか理解できずにただ棒立ちになっていた。

「さすがに女子中学生を真つ黒焦げにする気はないって」

八雲はそう言いながら橋の欄干に寄りかかって煙を吐き出す。

美琴はその間になんとか現実へと戻ることに成功していたが、彼女はいまだに八雲のことを理解できなかった。

「あんななのよ・・・私の攻撃をはね返すなんてLEVEL5の第1位・・・一方通行のアクセラレータしかできないはずなのに・・・」

彼女は学園都市第3位の頭脳を必死で働かせるが八雲に関しては何の情報も導き出すことはできない・・・。圧倒的に情報が少なすぎるのだ。

「言つたる？俺はLEVEL0・・・ただの学生だ。まあ、これはいいチャンスなんだろうな・・・。学園都市第3位の二人きりで会話できる・・・な」

八雲がこれ以上吸えなくなった煙草を投げ捨てると、それに反応するように美琴は戦闘態勢に入った。

「なあに構えてんだよ。別に取って食つたりしねえって、大体・・・殺す気ならさつきやっちまってるって・・・」

「それもそうね・・・。でも・・・話すって言われても あんたみたいな変態と話すことは何も無いわよ」

「ははっ、変態、変態って・・・嫌われたもんだな。俺の名前は『八雲』だ。覚えとけビリビリ中学生」

「だあれがビリビリよ！私は『御坂美琴』！あんたこそ覚えときな

さい！まあ、聞きたいことはいろいろあるけど、とりあえず煙草は止めなさい。大体、学園都市の路上は全面禁煙なのよ。」

「小さいこと言うなって、最近学校行かないで仕事してたからいらしちまつてたんだよ」

「なつ　！あんた、学生！？なに未成年で煙草吸ってんのよ！？」

「別にいいだろう？ここは学園都市。俺はこいつがねえと生きてけねえの」

八雲は美琴の言葉を気にせずにもた煙草の煙を吐き出す。

彼女はイライラした様子で八雲に飛びかかった。

「おい、なにすんだよ！」

「いいからその煙草よこしなさい！」

「なんだよ、吸いてえなら一本やるって」

「バカ！そうじゃないわよ　って、わああっ　」

もみ合っている内に美琴は足を滑らせて八雲諸共転んでしまった。

「いたた・・・。ん・・・？」

美琴は胸のあたりに変な違和感を感じた。

そつと見てみると

「おい、苦しいって・・・いつまで人の顔に胸押し当ててんだよ」

自分の身に起こっている状況を認識した彼女は顔を真っ赤にしつつも明らかかな敵意を浮かべた。

「いやー、ラッキーっちゃラッキーだけど・・・なんかこのシチュ

エーション・・・デジャブの気が・・・  
恐る恐る美琴の顔を覗き込む八雲だったが、その行為は火に油だった・・・。

「こんの 変態野郎ーっ!!」

「なあ・・・っ!?!?ちよっ・・・!!」

完全に油断しきっていた八雲に電撃が直撃した。

「いや あれはお前のミスだろ」

八雲は先ほどの出来事のせいで美琴の前で正座させられていた。

「女の子にあんな仕打ちをしたのに反省もなしね。」

「分かったよ。悪かったって、いつかお詫びはするからさ・・・。  
てか・・・仕事で行かなきゃ行けねえし、もう時間だ」

八雲は左腕の時計を見ながら話す。

「というわけで俺はもう行くわ」

八雲は立ち上がって逆手を振りながら去ろうとする。

「なっ !ちよっと待ってっのお!!」

「 を拒絶する」

「え?あれっ!?!?身体が動かない!?!?ねえ、あんた!一体何をしたの!?!?」

「安心しろって、俺が認識できない所まで離れれば勝手に動けるよ  
うになるさ。じゃあな」

八雲は電撃を放とうとしたまま膠着した美琴を残してすっかり暗く  
なった学園都市の闇に消えていった。

「ったく、どこがLEVEL0（無能力者）よ。あんな訳の分かん  
ない能力。考え過ぎか あんなボーツとしたやつがLEVEL6  
とかに関係してるわけないわよね」

しばらくして膠着が解けた彼女は物悲しそうな表情を浮かべていた。

その頃第8学区にある研究所の前に八雲はいた。

「ったく……。今回こそ当りであってほしいもんだな……。行  
くぜ……！」

その時、研究所の門が轟音とともに吹き飛ぶ。  
巨大な土煙が周辺を包み込む。

「なんだ！？襲撃か！？敵はあの塵芥の中にいるはずだ、撃て、撃  
て！」

門番の兵士たちが一斉に銃撃を開始する。

「おい！お前はアンチスキルに連絡を」

「ぐああっ」

「ぬあっ！」

「がっ！」

「な、なんだ？　これは！？」

攻撃を開始して間もなく兵士たちは土煙の中から放たれた銃弾に次々と倒れ始めた。

「敵の抵抗が始まったぞ！反撃のすきを与えるな！」

指揮官らしき男の号令で銃撃はさらに激しさを増していく。だが同時に、反撃もその激しさを増していった。

「まさか　反射を使う能力者！？おい！銃撃やめろ！敵は能力者だ！」

兵士たちが銃撃を止めると完全に互いの攻撃は止まった。

「ああ、こんばんは。能力でも見破られたか？まあ、反射のスキルだと思っアウトラウンドているのだったらこの拒絶反応は止めねえよ！」

姿を表した八雲は一瞬で兵士たちの背後に移動した。移動行程は兵士たちの目にはまったく写らなかった。

「あ」

ひとりの兵士がゆっくりと崩れ落ちる。  
体中にある鋭い刃物で切り裂かれたような傷から真っ赤な血を噴き出しながら。

「なっ！がっ」

また一人、一人と兵士は体中から血を吹き出しながら倒れていった。そしてその場で立っていたのは激しい銃撃を受け続けていたはずの八雲だけだった。

「なんだよ 手応えねえなあ！まあいい、お前。研究室はどこだ？ 答えりゃ命は助けてやる」

八雲は虫の息となった兵士のひとりを足で小突く。

「てめえに教えてやる情報なんざ ねえよクズ」

兵士は八雲の要求を拒否し唾を吐きかける。  
最後の抵抗を終えた兵士はそのまま息絶えた。

「なかなか骨があるじゃんか。悪いな あんたが悪いんじゃないのねえの」

八雲は兵士の側にしゃがみこみ見開かれたままの目をそっと閉じさせた。

「クソツタレ っ！」

八雲は立ち上がるとゆっくり歩をすすめ始めた。



「おい！アンチスキルはまだか！？ はっ！」

研究室内 - 狼狽していた研究者は何か気づいたように振り向いた。

「おお、よく気づいたな。まあ、早速で悪いが 死んでくれ！」

その瞬間八雲を電撃が襲う。

それは研究者の一人が放ったものらしい。

だが八雲には電撃は届かない。

学園都市最強の電撃を防ぎ切った八雲にはたんなる静電気程度にし  
か見えていなかった。

「私はLEVEL4の能力者だ！貴様なぞに負けわせん！」

「はぁ・・・髭もじゃが、何言ってるんだよ！まあ、死んどいてくれ。  
お前の周囲空間を拒絶する」

「何？ ばあっ ！？」

能力者と名乗った研究者が突然苦しみ出す。

違う研究者たちはその様子を目撃して焦燥を隠せなかった。

「き、貴様 つ！なにをしたあ！？」

「奴の周囲の空気を無くしただけさ。そこの髭もじゃは今、重力  
がある宇宙の旅をしてんのさ。まあ、あんまりあんたらを苦しませ

たくないし、じゃあな」

突然、研究者たちは胸から血を噴き出しながら倒れていった。もちろん一人残らず。

「悪いな まだこの能力はバレるわけにはいかないんだよ。ったくこれ以上人殺すのはやってらんねえな」

八雲は煙草に火をつけ煙を吐き出す。

「ちっ、ビリビリのやつに見られてたら殺されてたな」

八雲は笑みを浮かべていたがその悲しげなつぶやきが研究所の闇に融けていった。

## 設定（前書き）

こんばんはー！

1話目の前書きでは何も言えませんでした。が、疲れていただけですの  
で（泣）

今回は設定です。

よろしくお願いします。

## 設定

『とある科学の拒絶反応』<sup>アウトラウンダー</sup> は架空の登場人物である神凧八雲<sup>かんなぎやくも</sup>を主人公とした物語。

### 神凧八雲<sup>かんなぎやくも</sup>プロフィール

年齢 15歳

生年月日 7月20日

所属 学園都市

能力 拒絶反応<sup>アウトラウンダー</sup>

身長 178cm

体重 56kg

好きなもの 音楽、散歩、煙草、人助け、みんなの幸せ、面白いもの  
嫌いなもの 殺人、偽善、納豆、自分

備考：彼の能力「拒絶反応」<sup>アウトラウンダー</sup>は普段は八雲が認識した事象にのみ有効。彼が常時持ち歩いている煙草は彼の自作で、自分の能力に制約をかける効果があり、吸っている煙草の色によって制約の強さが変わる。

持続時間は1本で90分。

なお、彼は世界でも数少ない「原石」の一人である。

八雲は5年前に家族と幼なじみを目の前で殺されたことから命令を

くだしたと思われる人物がいる学園都市にすることを知り、研究所を襲い情報を集めている。

彼は基本的に人を殺害することを嫌っている節があるが家族がなぜ殺されたか知るためならそれすらいとわない。

実は上条当麻と同じ高校に通っているが、八雲は学校に行っていないのでお互いのことは知らない。

美琴と出会ってからはずとは違った彼女の優しさや正義感を認め、困ったときには手を差し伸べるようになった。

学園都市のデータベースには無能力者（LEVEL0）として登録されているが、教育を受けずに超能力を発現した為であり、人前であまり能力を使わないことからその实力を知る者は美琴一人である。学園都市第3位である超電磁砲レベルガンを退けるなど、そのポテンシャルは計り知れない。

身体能力はアンチスキルアフセラレーターの精鋭たちと比べても遜色ない。

美琴曰わく『一方通行にすら匹敵する實力の持ち主と評された。』

彼の能力は上条の『幻想殺し（イメージブレイカ）』に酷似しているが、異能の力しか打ち消せない上条とは違い、八雲が認識した事象ならばどんなものでも打ち消すことができる。

また、応用力に優れ、周囲の空間を拒絶させることで真空の刃を作り出したりできる。

## 一人

1本の矢は簡単に折れてしまう・・・。

3本の矢の話は有名だ。

1本の矢は簡単に折れてしまつが3本に束ねた矢は折ることができない。

この意味は一人よりも仲間と共に進むべきだという古人の教えだ。だが・・・、深い闇に仲間を引きずり込むことを彼が是とするか非とするかはまた別の話だ・・・。

6月27日

21

今日も初夏にふさわしい暑さを優に超えた暑さである。  
街行く人々はみな一様に汗を流していた。

その中には神風八雲・・・彼の姿もあつた。

「暑い・・・」

このうだる猛暑の中彼が出歩いているのにはもちろん訳がある。  
ある人物を探すためである。

「市場大ごほまほ・・・か・・・。つたく、この地区ちくにいるって噂うわさだったけど、  
デマでまだったんかなあ・・・。」

木陰にあるベンチを選び八雲は腰を下ろす。  
煙草に火を着けてみるが暑い中ではあまり吸う気にはなれないだろ  
う。

市場大 先日、八雲が襲撃した研究所のデータベースの中に彼の資  
料があった。

八雲の記憶の中にある髭をたくわえた屈強な男。。。

八雲の家族が殺害された日。。。

八雲と共に生き残った唯一の人物である。

「第7学区。。。さすがにこんな場所に都合よくいるわけねえつて  
か。でもなあ。。。」

「見いつけたあ！」

「のああ!？」

いきなり八雲の体に衝撃が走った。

原因はというと。。。

「背後からドロップキック喰らわしてんじゃねえ!ビリビリ女!」

「ああら、こんな真昼間からこんな場所ではんやりしてるのが悪い  
んじゃないですかあ?無能力者さん?ていうか!私には御坂美琴つ  
ていう名前があんの!いい加減覚えなさいよお!」

嫌味たつぷりの嫌味をぶつけてくる美琴に対し、八雲はもはや怒り  
を通り越してあきれた表情を浮かべていた。

「。。。たく、学校はどうしたんだよ?まだ午後になったばっかだ  
ぜ?」

「今日の授業は午前で終わり。で、ぶらついてたらあんたを見つけ  
たってわけ」

見つけたからドロップキック喰らわすのかよ……。と八雲は思いながらここ数日間のことを思い起こす。

三日前 街中でいきなり電撃を喰らう。

二日前 ファーストフード店にて膝蹴りを喰らう。

昨日 彼女の落とした雷によって家電製品に重大な損傷を受ける。

等々。

最近の八雲はことあるごとに美琴に付きまとわれていた。正直迷惑である……。

「さあ、今日こそあんたと決着つけてやる!」  
美琴は元気よくそう宣言すると戦闘態勢に入る。

「はぁ……。こんな街中でやったら被害がでちまうだろ……。って・  
・なんだあれ?」  
「へ?」

美琴は八雲が指差した方を見る。  
そこには一人のサラリーマン風の男が倒れていた。

「強盗だあ!誰かあいつらを捕まえてくれえ!」

「強盗?まったく……。こんな昼間っから……。まあ、ちよっどいー  
わ。先に捕まえた方が勝ちね……。って、あれ?」

美琴は思いつきの勝負を八雲に持ちかけようとするが、すでに八雲の姿はなかった。



彼はすでに強盗確保に動いていたのだ。

「とうっ！」

八雲は強盗に追いつくと先ほど自分がくらったようなドロップキックを一人に浴びせる。

「へばらあ！」

強盗の一人が奇声と共に地面に這いつくばる。

「おいおいお前ら……。なあに白昼堂々犯罪犯してんだよ……。おとなしく捕まりやがれ！」

「くそっ……。この餓鬼！ぶつ殺してやる！」  
強盗の1人が八雲に銃を向ける。

しかしそれはすぐさま八雲のハイキックによって叩き落とされた。

「んなあぶねえもん向けてんじゃねえよ」

銃を取り出した強盗も二段蹴りの要領で繰り出された八雲のハイキックが米神に直撃し、その場に沈む。

「ぐうっ……。なめてんじゃねえぞガキが！」

最後の1人となった男は手のひらから炎を発生させそれを放つ。

突然の攻撃だったが八雲は後方に跳躍することでそれを回避した。

「なるほど……。能力者ね……」

「はっはっは、びびったか？ガキがあ！無能力者風情がLEVEL 3の俺様に勝てるわけねえだろ！」

男はさらに炎による攻撃を繰り出してくる。

「言ってる三下」

八雲は再び跳躍によって攻撃をかわす、着地した場所は男のすぐ真後ろだった。

「あばあ！」

八雲は男の後頭部に手刀をくらわせる。

「LEVEL3が聞いてあきれるな・・・」

男は次の瞬間には頭を地面に突っ伏していた。

「さて、これが盗られたもんか」

八雲は強盗が持っていた黒いバッグを持ち上げる。思っていたよりもずつと重量があるバッグだった。

「やけに重いな。何が入ってたんだよ？」

「ちょっとー！待ちなさいよー！」

八雲が奪われたバッグを持ち主に返しに行こうと考えているとダッシュで美琴が走ってきた。

「遅いご到着だな、レールガンさん」

「なによ、さっきのお返しのもり？小さい男ねえ。。。にしてもあんた強いんだね、能力者もいたみたいじゃない」

美琴は近くの木に燃え移った火を見て咳く。

「なんてことないただのごろつきだったよ・・・」

まさか誉められるとは思っていなかった八雲は少し恥ずかしそうに軽い言い訳を試みる。

「ま、さすがは私が認めた男よねえ」

「はぁ・・・？別にお前に認められても嬉しくねえよ・・・」  
「まったく・・・あんたねえ、この私が認めてあげるって言ってんだから・・・少しは喜びなさいよねえ・・・」

美琴は頬を膨らませて反論した。

対して八雲はやれやれといった姿勢を崩さなかった。

「ま、なにはともあれ奪われたもんは奪い返したし持ち主に返しに行こうぜ」

「ええ、そうね」

二人は黒いバッグを持ち主の男に返しに行った。

「ほら、おっさん。盗られたのこれだろ？もう盗まれんなよ」

「いやぁ、すまないねえ。私がまだ現役だったら・・・！！？」  
サラリーマン風の男は顔を上げて八雲の顔を見た瞬間表情を凍りつかせた。

「どうしたおっさん？」

八雲が問いかけると男は急に元の表情を取戻し、バッグを受け取ると「それじゃあ」とだけ言い残してそそくさとその場を去って行った。

「なんなのお？あの態度・・・。助けてあげたっていうのに」  
美琴は訝しげに男の去って行った方向を見る。

「さあな、んじゃまあ一件落着いてことごとくじゃあなあ」  
「ああ、そんじゃ」

八雲は手を振って美琴に別れを告げた・・・のだが、やはり思い通りには行かず、美琴に背後から首根っこをわしづかみにされた。

「なあにどさくさにまぎれて逃げようとしてんのよ!？」

「あつ、あはははは、やっぱりバレマシタ？」

「あつたりまえでしょうが!!さあ!さつさと勝負するわよ」

八雲は首根っこを掴まれたまま引つ張られていく。

そして思う

「不幸だ・・・」

「ああお姉さま。こんな所で何をしてらっしゃるの?」  
突然背後から声がした。

だが八雲は首元を掴まれており、振り向くことができない。

「あれ?黒子。あんたこそここで何してんのよ?」

「もちろんジャツジメントのお仕事です。でも・・・ここにお姉さまがいるということはもう解決されましたのね」

「うん。まあ、解決したのは私じゃないけどね、こいつ」

八雲は美琴に無理やり引つ張られて黒子と呼ばれていた人物の前にひきずり出された。

「あらあら、一般人ではありませんの。なにはともあれ事件解決にご協力いただき、ありがとうございます。そうそう・・・自己紹介が遅れましたわ。私・・・白井黒子と申しますの」

「ああ、俺は神風八雲。たいした奴らじゃなかったし・・・、まだあつちで寝てるだろうからさ」

「ふうむ・・・。犯人逮捕にご協力いただいたことには感謝いたしますけど、あなた!一体お姉さまのなんなんですか?」

「え・？えーと・・・被害者・・・かな？」

なぜかは分からないものの憎々しげに黒子は八雲を睨み付けている。関係のことを聞かれているのだろうし、彼はありのまま思っていたことを口にした。

「被害・・・者？」

「そうなんだよ！こいつ人を見かけるたびにビリビリ　って攻撃してくんだぜ！俺はこう・・・もっとお嬢様らしいふるまいを学んだ方がいいと思うんだ」

「ほうほう確かにお姉さまの普段の振る舞いはレディとしてははしたありませんわね・・・。」

今まで散々被害を受けてきた八雲はここぞとばかりに不満をもらす。意外と黒子もそれに乗ってきたことによって二人は止まらなくなっていた。

「だろう？とにかく人を見つけたからって普通ドロップキックなんて食らわさないよな！」

「確かに・・・私も一体何度！お姉さまのキックを受けてきたことか・・・」

「あの・・・？もしもし」

「しかもこないだなんかあいつが雷落としたせいで電化製品が全滅しちゃっし・・・」

「まあ、それはお気の毒に・・・。確かにお姉さまがクーラーを壊してしまったせいで、毎晩寝苦しい日が続いて・・・」

意外と二人は話が合ったようで、美琴の振る舞いについて次々と不

満を述べていった。

だが、美琴がそれを聞いて快く思っわけがない。  
まあ、至極当然。彼女の沸点を越えてしまった。

「あ・ん・たらねえ・・・」

「へ？」

美琴の異常な程に威圧感ある声に、二人は思わず気の抜けた返事をしていた。

そして彼女を見た途端に八雲と黒子は硬直する。

「は・・・般・・・」

「だが、般若じゃあああ！！！」

「ぬあああああ！！！」

八雲の余計な一言は美琴をキレさせるのに十分な威力を発揮した。  
周辺にある信号機が過電圧によって動かなくなっていく様が八雲の目にありありと映し出されていた。  
黒子はいつのまにか姿を消していた。

「あんたは、逃がさないわよ」

「ひっ・・・す、すいま・・・ぎゃあああああ！！！！！！！」

八雲は・・・死んだ・・・。

「いや、がちで死んだと思った」  
公園のベンチに座りながらアイスを食べている八雲の服は所々焦げ付いていた。

「あんだだったら大丈夫だと思ったのよお。．．こないだは平気な顔してたのに．．」

美琴は八雲の隣で申し訳なさそうな顔でアイスを食べている。もちろんこれはやりすぎてしまった美琴のおごりである。

「まあ、生きてんだからいいか。たしかに俺らも言い過ぎた。てか、あの．．黒子？だっけ。あいつはどうしたんだ？」

「ああ、黒子はあれでLEVEL4のレポーターだからね。まったく．．逃げ足だけは早いんだから．．」

「あつそ．．」

最早何も言う気力がなくなった八雲は空を見上げた。

なんだかんだあつて赤く染まってしまった雲に向かってため息をつく。

「．．っは．．！」

八雲は何かに気付いたように後ろを振り返る。

公園の外からこちらに笑みを浮かべて微笑む男に彼は焦点を合わせた。

「わるいな、今日はもう帰るよ。アイスサンキュな」

「え？あ、ちよつと！」

八雲が突然走り出したため、美琴はうまく反応ができなかった。

「あれ？あの人・・・」

八雲が向かった先にいる人物が美琴の目に入る。

「さっきの・・・」

背中を向けて走り出した公園の外にいた人物。

それは・・・先ほど強盗にあっていた男だった。

（あの殺気は、あいつが放ったものなのか？まあ、どっちにしろ・・・）

「捕まえたぞ！このうすらハゲ！・・・んなつ・・・」

八雲は追いつきそして捕まえるために飛び掛かった。はずだが途端に体が宙を舞い地面に叩きつけられた。

「があっ・・・」

「まったく・・・これは何の因果だろうね？こんな所で神風の忘れ形見に出会ってしまうなんてねえ！！」

「なん・・・だと」

男は倒れている八雲に近づいてくる。

咄嗟に八雲は立ち上がり戦闘態勢に入る。

「お前・・・なんでそのことを知っている!？」



「おやおや、君は忘れてしまったのかい？5年前のあの忌まわしき事件を」

「なっ・・・」

八雲は記憶を遡る。

思い出したくもない血の海・・・。

そこから立ち上がった自分の姿・・・。

動かない人形たち・・・

そして・・・

「市場・・・大・・・！」

八雲の記憶の中

自分と同時に立ち上がり、背中を向けて走り去っていった男の顔。

確かにきれいに髭がそられ、整えられた髪をしていたが、それはまぎれもなく市場大だった。

「やっと思い出してくれたか・・・。しかしな、私は君に生きていてもらっては困るんだよ。今、こうして私の座っている椅子は死んだとされた君が私にくれたものなんだからねえ！！」

「言ってる！クズ野郎ーっ！！」

八雲は市場に殴り掛かる。

能力はもし人に見られてしまった場合を考えて使わないが、市場大はそれほど甘い相手ではなかった。

「ぐあっ・・・！」

飛び掛かっていった八雲の体がまた宙を舞い今度は壁に叩きつけられた。

「手も触れずに・・・おまえ・・・」

「気づいたかい？そう・私の能力は空間制御サイコキネシスのLEVEL4。LEVEL0の貴様が勝てる相手ではないのだよ！」

「くそつ・・・！（能力を使うか？いや、そんなところを見られたらまずい・・・。）」

「なにをボーツとしてるんだい！？」

「はっ・・・！」

気づくと市場は目の前でこぶしを振り上げていた。

咄嗟にガードするが予想以上のパワーに思わず後ずさる。

「でも・・・俺の攻撃範囲だ！」

八雲は反撃に移る。以前アンチスキルと交戦した際に力でそれを打倒した彼は自分の力量に絶対の自信を持っていた。

その彼の一撃が市場に迫る。だが・

「まだまだだな」

「なっ・・・！」

市場は彼のこぶしをいともたやすく掴んだ。

瞬時に発動されたテレキネシスに八雲は再び宙を舞った。

「くそつ・・・」

「忘れたのかい？私は君たち家族を襲った暗部組織のメンバーだった。その程度では勝てるわけがないだろう！」

「くっ・・・！」

「ちよつと！何してんのよ！？」

「え？」

突然聞こえてきた声に八雲は振り返る。

自分がいる路地の入口に美琴が息を切らせながら立っていた。

「あんた・・・なんで・・・」

「なんで追ってきた!？」

「うっ・・・」

恐ろしいほどの剣幕の彼に美琴はビクツと体を震わせた。

「早く逃げる!お前まで・・・こんな闇に入ってくんじゃねえ!」

「ほう。あの子は君の女か」

「がっ・・・!」

八雲は市場のいる方向を見る暇もなく壁に叩きつけられた。

市場は美琴に近づいていく。

「うあっ・・・!」

突然美琴の体が宙に浮いた。

テレキネシスによって彼女の首が締め付けられていく。

「・・・っ・・・はあ・・・!」

「この子を殺したら君は一体どんな顔をするだろうね」

市場はさらに力を強くする。

「や、やめろ・・・」

八雲は動こうと試みるが、飛ばされた衝撃で太ももに木片が刺さった状態で立ち上がることもできなかった。

「やめろ　　っ!」

「ぐあぁっ!」

八雲が叫んだ瞬間、男は壁に叩きつけられた。

「くっ！なぜだ！？貴様はLEVEL0のはず、能力が使えるはずはない！」

「ああ、でもなあ使えるってことと、つかえねえってことは違うんだよ……。危なく俺のいらねえ考えのせいで、ビリビリを殺しちゃう所だったぜ」

そういつて八雲は気絶している美琴を見る。

ちゃんと呼吸はしているようで、その無事は確認された。

「ま、まさか貴様！5年前と同じ力が覚醒しているというのか！？隠していたというのなら、なぜ今更……」

「……だちなんだよ……」

「は……？」

「そいつは友達なんだよ！ああ！甘えよ！でもな、そいつは俺の闇の中に突き落とすわけにいかねんだ！俺が力を使ってそれがバラタとしても！そんな時は甘んじて死ににいつてやる！！」

「黙れ！この死にぞこないがあ！貴様はそこでスクラップにでもなつておれ！」

その言葉と同時に近くにあった鉄製の大きなゴミ箱が八雲に向かって飛来する。

「邪魔だ……」

八雲が左手を振るうとゴミ箱は反射され市場の近くに着弾する。

「ぬああ！」

市場は衝撃に耐えられず、その場に倒れこむ。

八雲は彼の目の前でざっという音を立てて止まった。

「ひいー！」

自分ではかなわないと悟った市場は、腰を抜かしながらも逃げようとする。

「さんざんやってくれたお礼だ」

八雲はゆっくり歩きながら市場に迫る。

そして彼は言葉にする。

「俺は　お前を　拒絶するー！」

途端周囲の廃ビルが崩れ始めた。

市場の体が徐々に埋もれていく。

「た、助けてくれえ！」

「んなこと言ってねえでお得意のサイコキネシスでも使えよ。ま、お前がこの量の瓦礫を自在に操れたら助かるだろ。」

「ぐっう・・・ならば私の力を見せてやる！」

市場は能力を発動させ、瓦礫をどかそうと試みる。

「なっ！力が使えない！？」

「ああ、そうそう。お前の能力拒絶してあるから使えないんだっけ？はははは、忘れてたぜ。ま、そういうわけで死んでくれ」

ビルの崩落が進む中、八雲は市場に背を向けて歩いていく。

「ちくしょおおおおお　　！！！！」

最後の彼の言葉は崩れ行く瓦礫の中に吸い込まれていった

「んっ」  
「目、覚めたか」

目覚めた美琴の目には広い夜空が飛び込んできた。  
周囲に明かりがないせいで星がよく見えていた。

「なに呆けてんだよ」  
「いたっ！」

八雲の空手チヨップが美琴の額に直撃した。

「ちよっと、何すんのよ！っていうか、あんたボロボロじゃない！  
あいつは！？あんたをぼこぼこにしてたやつ！」

「お前ってやつは・・・起きた途端にうるせえんだから」  
「え、だって・・・」

「あいつは撃退した。お前は首絞められて気絶してたんだよ」  
「そういえばそうだったけ・・・私・・・LEVEL5のくせになにもできなかつた・・・」

申し訳なさそうに肩を落とす。  
八雲はそれを見てふっと笑った。

「別にそんなの誰だってあるだろ。お前らしくねえぞ、ビリビリ中  
学生」

「なっ・・・ビリビリって言うなって言ったでしょー！」  
美琴はぱっと立ち上がって反論する。

「ま、そんなくらい元気なら大丈夫だろ。早く帰れよ、常盤台って門

限があんじゃねえの？」

「あ、しまった！忘れてた……。で、あなたはどつすんの？」  
「どつする？」

八雲は改めて自分の姿を見る。

ボロボロになった体で病院には行かないのか？と尋ねられているようだ。

「病院行くんなら送ってくよ。どっかで死なれてたら寝覚めが悪いしね。それに、あんたを倒すのはこの私。常盤台のエース。『超電磁砲』御坂美琴なんだからね！」

威勢よく宣言する美琴の言葉に八雲はまた ふっと笑って応えた。

「ああ、退院したら待ってんよ！ビリビリ中学生！」

八雲が微笑んだのにつられたのか美琴もふっと微笑んだ。

そう。一人ではだめだった。

八雲 彼はようやく・・・友の意味を知れたのかもしれない

木山春生(前書き)

投稿に間が空いてしまいました。  
始まったばかりなのにやばいだる俺!!

今回はアニメ版に準拠した内容ですが、お楽しみください。



木山春生

「神風ちゃん、なんでこんな大怪我しているのか、先生にちゃんと話してください」

「は？へ？」

昨日、市場大との戦闘の後、私神風八雲はビリビリこと御坂美琴に付き添われ病院へ。そして目覚めると

「なんで子萌先生？」

なぜか子萌先生が俺の上に乗っていた。

「やあ、お目覚めかい。ん？どうしたんだい？そんな疲れ切った顔をして」

「いえ、別に・・・」

はあ、と一つため息をつく。

理由を挙げるならさっきの出来事がもっとも最適だろう。

目覚めるとまず子萌先生がいた

「だから、なんでこんな大怪我をしちゃったのかって、先生は聞いているのですよお」

「いや、だからなんで子萌ちゃんがここにいんの？」

私、神凧八雲は今、怪我をしているというのにベッドの上に正座させられ、下から見上げてくる子萌先生相手に説教を喰らっている。

「だあかあらあ！病院から神凧ちゃんが運び込まれたって連絡があつて先生いてもたつてもいられず、お見舞いに来たんです。さあ、今度は神凧ちゃんが私の質問に答える番ですよ」

「うつ・・・！」

昨日のことを思い出す。

正直に話せるわけない！

襲われた拳句ボロボロになって、ビリビリを死なせるところだったつて

「うー」

いや、そんな怒った幼児みたいな顔で見上げないで！

なんかものすごく悪いことしてる気分になるから！

「いやいや、ただの事故の巻き込まれただけですから安心してくださいつて」

「ホントのホントですか？」

子萌はさらに顔を近づけて詰問してくる。

八雲はまた一つ大きなため息をついた。

「ホントです！先生は自分の生徒を疑うんですか？」

「あつ・・・、そうですね。あなたは私の生徒ですよね！」

急に子萌は顔を明るくして言った。

「明日から期末テストですのでちゃんと学校に来てくださいね！あなたの場合システムスキャンもありますので！それではまた明日なのです！」

「え、ちよっ・・・！」

それだけ言い残すと子萌は立ち上がって扉に向かって歩いていく。

「ばいばーい」

ピシャツと扉が閉じられる。

「はあ。やっぱりめちゃくちゃな人だな。入学式の時からずっと」

八雲はまた一つため息を吐くと夏らしい青空を見つめ、笑った

「で、先生。いつ退院できますか？」

「ああ、怪我はもう治ってるからね。いつでも退院して結構だよ」

カエル顔の医者はカルテを見ながら言った。

「ありがとうございます。お世話になりました」

「うんうん。元気になってなによりだ。お大事に」

「いい生徒をお持ちになったようだ。ね、子萌先生」

カエル顔の医者は奥の部屋に向かって声をかける。

そこからすつと、子萌が姿を現した。

「はい。あの子はいつも他人ひとのことを思って行動できる、優しい子なのです」

「それで……今はあなたのために動こうとしてるようだね」  
「ふふっ……」

子萌は満面の笑みをこぼした。

「私は自分の生徒がかわいくてしょうがないのです」

そう言うと子萌はさよならを告げて病室から出て行った。

「本当にいい教え子をお持ちだ……」

病室に一人残されたカエル顔の医者をつぶやきは開け放たれたドアの向こうの青白い空間に吸い込まれていった。

「はあ……、そういえば学校に行かなきゃ退学になる可能性もあるんだよなあ……。めんどくせえなあ」

病院から出て街をゆつくり歩く。

いつものようにそびえたつビル群を見上げながら散歩をしていると、見慣れた背中を発見した。

「おーい、ビリビリー！」

「ほえ？ああ、あんたか。怪我は？もう大丈夫なの？」

「ああ、もうピンピンしてる。てかどうでもいいけど歩きながらパン食ってんじゃねえよ。お前はありきたりのラブコメヒロインか」

「ちよつと！誰がラブコメヒロインよ！？」

「冗談だつて、んな怒んなよ」

八雲はパンを食べながら歩く美琴をたしなめる。

まったく、といった表情はまるで八雲が美琴の兄ように見える。

ふと美琴が自分の太ももを見ていることに気付いた。

「もう太ももの痛みはねえよ。カエル顔の腕のいい医者が出てな。その人の治療を受けたらすぐに痛みはなくなった」

「ふーん、そつか。じゃあ、これで堂々と勝負を挑めるわね」

ニヤツと美琴は口元を歪める。

それを見た八雲はしまったという表情で後ずさりしてしまっただった。

「疲れた・・・」

「上条当麻あ！」

突然、美琴が声を張り上げて叫ぶ。

なんだ？と思いつながら美琴が叫んだ方を見ると一人の学生と目元にくまのある女性が八雲と同じくなんだ？といった表情でこちらを見ていた。

「ん？あの制服は？」

八雲は学生が着ていた制服にどこか見覚えがあった。

だが、なかなか思い出せないのしぶしぶ先に行ってしまった美琴の後をのろのろとついていくことにした。

「おいおい、お前ら。あんま人の多いところで喚き散らすなよ」

八雲は出会った途端に言い争いを始めた美琴をなだめようと声をかけた。

明らかに美琴が一方的になにか言っていたようだったが、男子学生

は特に嫌な顔をしていなかったので少しホツとした。

「ああ、わりいわりい。あんたこいつの知り合いか？」

「まあ、そんなところだ」

男子学生が美琴を指さしながら質問してくる。

八雲はふうとひとつため息をついてそれに答えた。

「で？そちらの女性は？さつき道を聞かれていたように見えたけど」「ああ、車を止めた駐車場が分かんなくなったらしくてさ。さすがにあんたに頼むわけにはいかないだろうしさ」

「ああ、それだったらいづつがいる。」

八雲は美琴を指さして答える。

「何言ってるのよ！」「と美琴はすぐさま反論するが、もはや二人には聞こえていないようだった。

「さつきコンビニで立ち読みしてたみたいだからな。俺もやることないし手伝うよ。」

「お、本当か！？助かるぜ、今日どうしても行かなきゃならないところがあったさ」

「それなら早く行けよ。こっちはどうにかしとくからさ」

「ははは、本当に助かるよ」

「あんたらはあ・・・」

「「は？」」「

仲良く会話していた二人だったが、聞こえてきた美琴の声に思わず会話をやめる。

正確には美琴の声に反応したわけではないかもしれない。  
おそらく一緒に聞こえてきたバチバチという音に反応したのだ。

そして今まさに電撃を放とうと美琴だったが、突然聞こえてきた間の抜けた声と光景に硬直する。

「暑いな・・・」

「・・・へ？」

しばらく言葉を発していなかった女性がようやく喋ったと思ったら突然服を脱ぎ始めたのだ。

「のわああ！」

男子学生はみつともなく目を手で隠し、おろおろとろたえ始めた。八雲は対照的にただ顔をそらすことで済ませていた。

「な、なにをしていらっしやるんですか・・・？」

なぜおまえがテンパるんだ・・・。

と八雲は思ったが美琴に今そんなことを言っただけで電撃をくらうのも面白くないと判断し、黙っていた。

「この炎天下のなか、かなり歩き回ったからな。汗びっしょりだ。」

そんでなんであなたは涼しい顔して服脱いでんの？

と八雲の頭の中でツッコミが入るが、初対面の人にツッコむのも申し訳ないのでまたもや口には出さなかった。

「と、とにかく！早く服を着てください！見られてる、見られてますからあ！」

男子学生はあわてて服を着るように促す。

が、近くにいた人たちはその行為を勘違いし、口々にアンチスキルに連絡した方がいいんじゃないか、とかあの人脱がしたんだーなどと口々に言っていた。

「お、俺じゃない……。ごかいだああああ！」

その場の空気に耐え切れなくなった学生は、逃亡を図った。

一瞬にして彼の背中は見えなくなってしまった。

「放置すんのかよ……。まあ、いいや。二人とも、さっさと探そうぜ」

「おお、手伝ってくれるのか。意外にいい子じゃないか」

「へえ！？ちよ、ちよっと待ってよ。ていうか！早く服を着てくたさいー！」

こうして男一人に女二人の奇妙な旅が始まったのだった……。

「はじまんねえよボケ」

「へ？あんた誰に向かって喋ってんの？」

とりあえず三人は歩き疲れたと言う女性のために木陰のベンチを選択して座っていた。

女性は喉が渴いたと言って近くの自販機で飲み物を購入している。

「なんでもねえよ。てか、木山春生、だっけか？変な人だな」

「確かに……。でもちよっと変わってるけど悪い人じゃなさそうね」



先ほど出会った女性は木山春生と名乗った。

八雲は煙草に火をつけると木山春生について思考を巡らし始める。

『確かに悪い奴じゃなさそうだけど、目の下にクマができるまで一体何をしてるんだ？もし・・暗部の人間だったら・・いや、んな訳ないか。暗部の人間がこんな真昼間から人通りの多い場所で目立つ行動をするわけないしな。だが・・なぜか彼女は危険な気がする・・ま、気のせいってだけじゃなんも根拠にはなんねえな・・』

煙を思いつきり吸いそして吐く。

八雲は暗い闇の中で生きてきた人間・・。

彼はその分それらのことに関しては感覚が研ぎ澄まされているし、自信もある。

それでも感覚で何かを嗅ぎ取っても今回ばかりは自分の感覚を否定した。

八雲が頭を通常モードに切り替えようとした時、突然間の抜けたカエルの鳴き声が聞こえてきた。

「ん？なんでカエル？」

八雲がばつと正面に目を向けると美琴がカエル型の携帯を取り出し、通話ボタンを押すのが見えた。

「もしもし。ああ、黒子？どうしたの？」

八雲は音の正体が美琴の持つ携帯だと理解すると、呆れた顔でうなだれる。

彼はすぐに顔を上げ、木山春生のいる自販機の方に目をやった。

「なっ・・・、あれは・・!？」

そして八雲は彼女の持つものを見て驚愕した。

「この真夏に・・・スープカレー・・・だと・・・？」  
そう。

木山春生の手にはアツアツのスープカレーの缶が三つ・・・大切そうに抱えられていた。

『落ち着け！俺！こんな真夏にスープカレーを買う人間はいない！暑さにやられてしまう！』

八雲はどうでもいいことに焦っていると美琴の会話が耳に入ってきた。

「あんたまでそんなこと言ってるのぉ？ないない、確かにちよつと変わってるけど悪い人には見えないから」

八雲は普通の会話を目の当たりにして少しだけ平常心を取り戻したが、次の言葉でまた焦ることとなった。

「変わってるわ、私のことか？」

「へ？」

声の主は木山春生だった。

今の会話を聞いていたのだろう。

ただ・・・その腕にはスープカレーの缶が三つ、しっかりと抱えられていた。

「ぬああああ・・・」

「ち、違いますよ！なんていうか・・・そのお・・・。てか、なんであんた、そんな悶えてんのよ？」

「聞くな・・・聞かない方がいい・・・」

木山春生の追求をごまかそうと八雲に話を振った美琴だったが、悶えている八雲を見て不思議そうな顔をしていた。

「ほら、手伝ってくれているお礼だ。」

そして八雲と美琴の前に缶が置かれる。

悶えている八雲とは対照的に美琴は嬉しそうにその缶を手にした。

「いったただつきまーす！…って、え？スープカレー…？」

美琴も出された缶の異常に気づき手を止めた。

「なんだ？お気に召さなかったか？」

「あ、いええ。そういうわけじゃないんですけど…やっぱり気分的には…冷たいものがいいかなあ…なんて…」

「気分的に…か。最近の若い娘さんはそういう選択の仕方をするんだっとな。すまなかった、買いなおそう。何がいい？」

「あ、いえ。お気持ちだけで十分です…あはは…はは…」

買いなおすという木山春生を制して席に着かせる。

美琴もさすがに訝しげな表情を浮かべ、八雲は相変わらず悶えていた。

「すまないね、ずっと研究ばかりしていると物事を論理的に考える癖がついてしまっただね。」

「研究者の方だったんですか。何の研究をされてるんですか？」

「脳生理学。主にAIM拡散力場の研究をね。」

木山はそこで暗に飲んでみると手で指示する。

顔をひきつらせながらも美琴は缶のふたを開けた。

「それって・・・能力者が無意識に周囲に発散している力のフィールドのことですよね・・・」

「ああ、もう授業で習ったかい？」

「ええ・・・一年の時に・・・」

美琴は再び飲むように促されたため、スープカリーの缶を見つめる。そして一度唾を飲むと、意を決してそれを喉に流し込んだ。

「たしか・・・人間の五感では感じ取れず・・・特殊な機械を通さなければ計測できないほどの弱い力だって・・・」

美琴の声はどこか苦しそうだったが、木山がそれに気づくはずもなく話は淡々と進んでいく。

「私はその力を応用する研究をしてるんだよ」  
木山は足を組みなおしながらどこか誇らしげにそのことを話した。

「そうか・・・それがあなたの一研究なのか」

「へええ・・・、ということは能力についてもお詳しいんですか？  
・・・って、あんた。いつの間に復活したのよ？」

「・・・今」

いつのまにか八雲は復活し、三人の会話に移行する。

「そうだね。なにか知りたいことでも？」

「ええっと・・・、どんな能力も効かない能力・・・。なんてあるんでしょうか？」

「能力といつてもいろいろあるからな・・・。例えばどんな能力が効かないんだ？」

「例えば高レベルの電撃を受けてもなんとでもなかつたり・・・」

そしてここで八雲は思った。  
この会話俺入れなくね？

八雲は能力を隠しており、力を使わなければ対処できない場合のみ  
その能力を開放する。

この会話は、下手すれば八雲の命に関わる話なのだ。

「ところで、君は飲まないのか？」

「はい？」

八雲は木山が指さしたモノを見る。

「スープカレー・・・」

「早く飲まないと冷めてしまう。さあ」

なぜか飲まなければいけない空気になっってしまったている。

美琴も飲み干したことを考えると飲まなければならぬだろう。  
男として・・・。

「くそおっ！！」

八雲はやけくそ気味にそれを飲み干した。

そして・・・

「ぎゃあああああ！！」

悲鳴とともに八雲は絶命した・・・。

「だから死んでねえっての・・・」

八雲たちは車を止めた場所をようやく思い出した木山の案内で、その駐車場の前まで来ていた。

「あんた、昨日の戦闘で内臓にも傷を負ってたんでしょ？」

「別にいいと思って言わなかったんだよ。今回ばかりは裏目に出たけどな・・・」

八雲は未だに痛む腹を押さえながら歩いていた。

「ああ！あそこだ。」

木山は自分の車を見つけたらしく声を上げて指さしていた。彼女は自分の車に乗り込んでシートベルトを締めた。

「いろいろと世話になったな。それじゃあ。」

木山はそれだけ言い残して車を発進させる。

二人はとうやく終わったということまで疲労感を滲ませるため息をついた。

「なんで私がこんなに疲れなきやなんないのよ・・・」

「同感・・・。もう帰って寝よう・・・」

任務の終わった二人はトボトボと駐車場の入口まで歩いて行った。

その時、至近距離から悲痛な叫び声が聞こえた。

「あああああああ！！！！」

叫び声の方角を見ると、男子学生が路上に座り込んでいる。

「全滅だ・・・折角の重要なタンパク源が・・・二時間も並んだっていうのに・・・」

学生服の男は割れた卵のパックを片手に夕日の中路上でうなだれていた。

と、彼が突然八雲たちの方を向く。

「あ」

「「あ」」

振り向いた男子学生は先ほど出会った学生。

「上条当麻」

「見つけたわよ！あんたあ！！」

目があった瞬間、美琴は声を張り上げて叫んでいた。  
近くにいた八雲は思わず耳を塞ぐ。

「さつきはよくも面倒事を人に押し付けてってくれたわねえ！もう大変だったんだから！」

「別に暇だったんだからいいじゃんかよ。貧乏学生にとって、特売品を手に入れられるかどうかは死活問題なんだ！常盤台のお嬢様にはわかるまい！」

出会った途端二人は言い争いを始めた。

当麻にいたっては先ほど割れてしまったと嘆いていた卵のパックを見せつけて、自分の行動の正当性を強調している。

「ったく・・・うつせえなあ・・・ガキかてめえらは・・・」

八雲がぼやいている間にも二人の口げんかはエスカレートしていく。

「こっちの方が大変だったんだから！八雲は気絶するわ、汚れたス

カート脱ぎだすわ！拳句の果てにはツン・・・っ！」

突然美琴が硬直した。

当麻は「ツン？」と間の抜けた声を出していたが、八雲には何を言おうとしていたかなんとなく分かっていた。

「ツンデレ？」

八雲がそう言った瞬間、美琴の頭がポンツと妙な効果音を発した。

「ん・・・んわけないでしょ！！私のどこがツン・・・っ！」

怒りの矛先を八雲に向けた美琴だったが、再び顔を真っ赤にさせ硬直した。

数秒の間の後、突然当麻の方を向いて指を指した。

「と、と、と、とにかく！勝負よ勝負！」

「勝負勝負って・・・いつもお前の全戦全敗じゃねえか」

当麻はなんだか呆れたような顔をした。

「う、うるさい、私だってまだ一発も食らってないんだからお相手よ、お・あ・い・こ！」

「ったく・・・じゃあ、どうしたら終わるんだよ？」

「へっ？そ・・・それはああれよお・・・私が勝つまで！」

当麻は先ほどより大きなため息をついて立ち上がった。

「・・・分かったよ。それで気が済むんなら・・・相手してやる！」



場所は変わって川の土手にある広場。

当麻と美琴の勝負であるはずがなぜか八雲も連れてこられた。

「おいビリビリい。少しは手加減してやれよお。そいつだって無能力者なんだから？」

「うっさいわね！そんな手加減してる余裕なんてないわよ！」  
「へえ・・・」

八雲は当麻に焦点を合わせる。

先ほど無能力者であると彼から明かされていたので、『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』  
御坂美琴の前に堂々と彼が立っていることに興味を惹かれた。

「それじゃあ、いくわよお！！」

美琴は開戦の合図とともに電撃を放つ。

だがその攻撃は当麻の右腕によって打ち消されたようで、彼にダメージは見られなかった。

「なかなか。」

次に美琴は電気によって磁力を帯びた砂鉄を剣状にし、当麻に斬りかかる。

当麻もなかなかの身体能力を有しているようで美琴の斬撃をことごとく躲していた。

だが、態勢を崩した一瞬・・・彼の背中に鞭のように伸びた砂鉄の剣が迫る。

「あ・・・」

だが、当麻はそれすら右手によって破壊した。

「でも……！これで！」

彼が態勢を立て直した時には、彼女の手は当麻の右手をしっかりと掴んでいた。

「さすがにゼロ距離なら……って、あれ？」

彼女は彼の体に電流を流した。

だが、効いていない……。

いや、能力自体が発動していないのだ。

「ん……」

当麻は握られた手をジッと見つめる。

そしてキツと美琴を睨み付けると拳を振り上げる。

「ひいつ……！」

美琴は殴られそうになり、涙目になって頭をかばった。

「おもしろえ」

しかし当麻の拳は振り下ろされることなく。

むしろ当麻はやられたふりをし始めた。

「ぐあああああ……！！やられたあ……」

当麻がへにゃへにゃになって倒れると、美琴はようやく顔を上げた。

「こ、降参ですう」

当麻は負けた演技を続けるが、それがいけなかった。

プライドの高い美琴には逆効果だった。

「ふ、ふざけてんじゃないわよお!!」  
彼女は顔を真っ赤にしながらも電撃を放つ。

ちなみに八雲はその光景を見て、腹を抱えて笑っていた。

そして八雲が笑っているうちに全力で能力を使う美琴と危機感を感じた当麻は追いかけてこを始めてどこかへ走って行ってしまった。

「あゝマジで面白かった。上条当麻だっけか？あいつ・・・なかなかいいじゃん」

残された八雲は川に近づけるギリギリの場所に立ち、煙草に火をつける。

「第三位と第四位の間には圧倒的な差があるとまで言わせた奴相手にあそこまでやるなんてな・・・」

一度煙を吐き、そして吐きだす。

白い煙は八雲の視界に映る学園都市の風景を白くぼかした。

「さあて・・・そろそろ出てきてくんねえかなあ。こっちもさっさと終わらせて帰りたいんだよ・・・」

八雲は自分の背後に向かって声をかける。

すると、どこから出てきたのか。四人の女が姿を現した。

「『原子崩し（メルトダウン）』 麦野枕利・・・ 学園都市LEE VELL5の第四位・・・そして暗部組織、『アイテム』の実行部隊を率いる女・・・ なんの用だ？」

「ああら、正体はばれてるってわけねえ・・・ まあ、いつか。どう

せ、あんたはここで死ぬんだからねえ！！」

木山春生（後書き）

『アイテム』でたああ！

はい、出てしまいました。

## 襲撃

八雲の前に突如現れた四人組 『アイテム』

彼女たちは学園都市の暗部組織の人間。

そして第四位の能力者 「マルチタウナー原子崩し」 麦野枕利。

なぜ彼女たちが彼を狙うのか……。

理由は？

その目的は……

「さあて……どう料理してあげようかあ？ ああ！？」

やけに言葉遣いの悪い麦野枕利。

彼女たち『アイテム』は学園都市の暗部組織

それが八雲の前に現れたということは……

「とうとう暗部のやつらに感づかれたってことか……」

八雲は一人小さく呟く。

今まで八雲が襲撃してきた場所は、いずれも暗部とのつながりがあるとされていた場所ばかりで、その報復で彼女たちはやってきた……。

そう考えるのが妥当だろう。

事実、八雲が暗部の人間たちと接触するのは初めてで、初めて会ったにもかかわらず異常なほどの殺気を四人は発していた。

「ひょうてき、かななぎやくも……。ほそく……」

「ああ……、お前は滝壺理后……だろ？能力は『能力追跡（AIM ストーカー）』。確か能力者を追跡する能力だったな」

「まあ、あなたはここで、結局死ぬことになるんですけどね」  
金髪碧眼の少女が言う。

『アイテム』の構成員である滝壺理后はピンク色のジャージを着た無気力な高校生くらいの女の子。この状況ですらけだるそうにたらずんでいる。

金髪碧眼の少女はフрендаゥセイヴェルン　その容姿から日本人ではないことが見て取れた。

他にも見た目十二歳程の女の子だが、オフエンスアーマー『窒素装甲』という力を持つLEVEL4の能力者である。

そして学園都市に七人しかいないLEVEL5の一人。  
麦野枕理……。

それが『アイテム』と呼ばれる暗部組織の構成員である。

彼女たちが現れても八雲は特に動じることなくまた煙を吐き出す。それを見た麦野はイラついた声を出した。

「あんたさあ。今の状況分かってるんですかあ？この私がいるつてのにずいぶん余裕そうじゃない。」

「……………まあな。てか、最初からなかなか豪華なゲストが来てくれたもんだな。最初はこう、もっと下っ端らしい下っ端が来ると思ってたんだがそれがあんたらつてことでいいのかな？」

そう言つて八雲はふつと微笑む。  
そんな彼に突然標識が飛来する。

八雲はギリギリで避けるとそれが飛んできた方向を見た。

「私の攻撃を避けるなんて超凄いですけど……………ここで超死んでほしいんですよ」

「はっ、無駄に甘い声出しやがって……………。そんなんで俺が欲情すると思つてんのか？笑えねえ……………」

自分の攻撃にすらまったく動揺すら見せず、しかも嫌味を返されて絹旗はムツとした顔をした。

「あんた……………超なんなんですかあ？性格超悪いですけどお……………」

「はいはい。てか、お喋りしてていいのか？お前らの目的は俺を殺すことなんじゃねえの？」

「確かにねえ……………じゃあ……………、ちやつちやつと終わらせてやつからよ  
おお！！！」

麦野が腕を振る。

すると八雲のすぐ近くで何かがぶつかったような音が響き、空気がはじけた。

「俺がお前みたい有名な名人の能力を知らないと思つてんのか？てめ



えの主な攻撃方法は固定した電子の『壁』を相手に叩き付ける。分かってれば対処は簡単だ」

「はっ！ これはこれは光栄だねえ……私のこと知ってたかあ……まあでも、私に勝てるわけねえだろお！！」

LEVEL5の麦野は再び同じ攻撃を仕掛ける。今度は挟撃するよ  
うな形で『壁』を放つ。

だがそれも八雲の力によって防がれた。

「終わりか……？なら、次は俺の番だ！」

八雲は懐から二本のナイフを取り出した。  
その瞬間麦野に向かって走り出す。

「はっ！ なら次はこれでどうだあ！」

「確かに、全方位を壁で囲んじまえば逃げ場もないしそうそう防げるもんじゃあない。でも、それすら意味ないんだよ！」

「なっ……！？」

八雲の周囲に配された六面体の壁すら彼の能力アウトラウンダーによって防がれる。  
麦野の攻撃を免れた八雲がさらに彼女に接近する。  
だが、突然足元に手榴弾が投げられたため彼は一旦後方に逃れた。

「邪魔すんなよ……金髪女」

「まったく……聞いてたことですけど結局、あなたは本当に口が悪いですね。」

「言っとけ三下……邪魔すると怪我するぜ。」

「ご自由に……結局私たちに与えられた指令は『市場 大を殺害した神風 八雲を殺してこい』ってことだし、結局……遠慮なくやらせてもらうので。」

「死ぬぜ……」

「結局、それはあり得ない。私たち『アイテム』は四人で『アイテム』なのです。結局、死ぬのはあなただけ。」

「言ってくれんじゃねえか……。まあ、こうなった以上近接戦闘に持ち込んで決着……。なんてのは無理みたいだな」

八雲はそう言うのと四人との間に距離があるはずなのにナイフを構えた。

そしてそれが振るわれた瞬間

麦野を謎の斬撃が襲った。

「っ……！てめえ！」

「喋ってる余裕なんてあるのか？」

八雲はその間もナイフを振るい続ける。

麦野もそれを能力によって防ぐが、『マルチタワー原子崩し』はその強大な力の反動で制御が難しい。そのため彼女は徐々に押され始めた。

「超らしくないですよ」

斬撃を繰り出していた八雲を巨大な鉄柱が押しつぶそうとする。それは絹旗が放ったものであった。

八雲は先ほどと同じく後方に跳躍して回避する。

だが、その先にはフレндаが仕掛けた時限爆弾があった。

轟音　　八雲の姿が炎の中に飲み込まれる。

「手え出すなよ」

「やられそうになってたのに何言ってるの。結局、私たちの手にかかれは当たり前のことですよ。」

「超あっけなかつたんですけどお。」

「はっ！市場を殺したってから期待してたけどこの程度かよ。つまんねえ……」

三人は標的の殺害によって任務を終えた。  
もはや彼女たちの頭の中には八雲のことなどのこっていない。

「ま、これでまた金が入るな！」

「超ギヤラがよかったですもんねえ。ホント、超割のいい仕事でしたよ。」

「まだ……終わってない。」

突然、今までだんまりしていた滝壺理后が口を開いた。  
終わったと思っていた三人は八雲が飲み込まれた炎を顧みる。

激しく燃え盛る炎。

それが風によって一瞬にして消し飛んだ。

「だあれがつまんねえって？麦野枕理い！」

「ちっ！死にぞこないがあ！さっさと成仏してくれよお！！」

麦野の作り出した『壁』が再び八雲を襲う。

しかしそれはまたもや弾け飛ぶような音と共に消え去った。

「ったく……反応が遅れてけがあしちまったじゃねえか。覚悟できてるんだろうなあ、ああ！？」

『アイテム』の四人はあまりの彼の剣幕に思わず押される。

しかし、八雲の体には爆弾の破片らしきものが所々刺さっており、明らかに立っているのさえ不可能だと判断できた。

「んな体で何ができるってんだ？今にもくたばっちまいそうじゃねえか。おい！」

麦野が手で合図すると絹旗が鉄柱を投擲する。

「なっ……！真正面から……止められた……？」

「ああ……、もうブチ切れたぜ……。てめえら……スクラップになる覚悟はできてんだろうなあ！！？」

八雲の周囲に風が吹き荒れる。

「まさかてめえ……『空力エアロポント使い』か！？道理で『壁』がぶち破られるわけだ。神風八雲……LEVEL5に相当する力の持ち主って上からの報告はマジだったみたいだな……」

麦野枕理は息を飲む。

自分の攻撃は効かない

自分の防御では防ぎきることができない

その差を埋めるためのモノはここに存在しない

すべての条件を見て、勝てる要素は一つもないのだ。

それでも彼女は口元を歪めて笑った。

「くっくっく……はあっはっはっはっは！！面白れえじゃねえか！やってやるよ……ぶっ殺してやっから……よ……お……」

突然麦野の体が前のめりに倒れた。

フレンドが特殊な神経ガスを液体化させたものを彼女の体に打ち込んだのだ。

「結局、分が悪いので退かせてもらおうわ。」

「てめえ……逃がすと思ってるのか？」

「はい。私たちは結局退かせてもらうので。まあ、これで終わりと  
思わないでください。今、暗部の中であなたの首には莫大な懸賞金  
がかかっています、いままであなたに煮え湯を飲まされてきた組織の  
人間もあなたの命を狙ってる。さて、いつまで生きていられるか結  
局……楽しみね。」

フレンドはそう言った瞬間、閃光が八雲の視界を奪った。

そして視界が戻った時には四人の姿は消えていた。

「逃げたか……たく、めんどくさく……なってきた……な……」

八雲はその場にうつぶせに倒れた。  
血が地面を流れていく。

「ちっ……！今更、ダメージがきやがった……。く……そ……」

八雲は一人河原で倒れていた。

聞こえる音はただ水の流れる音だけだった……。

## 襲撃（後書き）

短かったです……。

読んでくれた方、ありがとうございます。

## 意味（前書き）

投稿遅くなつてすみませんでした。

資料が届くの待っていたら一週間以上かかったもので……。

まあ、そんなの気にしねえ！という人はどうぞ。

## 意味

「まったく……。二日で二回も重傷を負って運び込まれるなんてねえ、君はそんなにこの病院が気に入ったのかい？」

「いや、誰も重傷を負ってまで病院は行きたくねえって!!………てか………なんで小萌ちゃんはちゃっかり先生の隣に座ってるの？」

「私があなたの先生だからですよ。」

少し頬を膨らませて反論する小萌。

彼女は八雲を心配してきたんだろっが、その心配はどこ吹く風。八雲はすでにピンピンしていた。

「いや、そんなの知ってるって。テストの準備とかあんじゃねえの？こんな朝っぱらから来るってことは、なんか用事でもあったんか？」

「うっ……。まったく神風ちゃんはあ……。そんなんじゃ折角持ってきた制服、渡しませんよ!!！」

「は？なんで制服？」

「うっ!!神風ちゃんは入学式にすら病欠で来ていなかったの、制服を持ってないじゃないですかあ!!そんなことも忘れちゃったんですかあ………?」

「冗談だよ、忘れてないって。ありがとう小萌ちゃん。今日からまあ、真面目に学校行くからさ。」

八雲は小萌から紙袋を受け取って中身を広げてみる。見るからに新品のその服は、今日来ていくことを考えると少し気恥ずかしいだろう。

しかし、八雲の顔にはそんな懸念は映し出されてはいなかった。



むしろ、どこかうずうずしているような、そんな感じだった。

「という訳で、先生はテストの準備の関係でそろそろ行くのです。神風ちゃん、サボっちゃだめですよ!!」

「わーかつてるって、安心して行きなよ。俺も後からちゃんと行くからさ。」

「はい！ぜえったい！来てくださいね！それじゃあ、またなのです！」

「はいはい。絶対に行きますから。」

笑顔で病室を出ていく小萌とそれを見てため息をつきながら微笑む八雲。カエル顔の医者はそれを微笑ましそうに見ていた。

「いい教師を持ったじゃないか。君は幸せ者だな。」

「俺にとつては口うるさいだけです。とにかく、怪我は治ったんですよね？早く退院の許可をもらいたいんだけど……。」

「ああ、もう君は完全なる健康体だよ。……でも一つだけ、気になることがあるんだ……。」

俄かにカエル顔の医者の表情が真剣なものに変わる。八雲も表情には出さないが、内心焦っているだろう。治ったと告げられた後にもったいぶったように警戒せざるを得ない発言をされたのだから。

「君は二日でかなりの重傷を負った。なのに次の日にはなぜかけるりと健康体に戻っている……。普通の人間には、まずありえないだろう……。骨折も、深い裂傷も、たったの一夜で完治するなんてねえ……。」

「……。」  
「確かに君の体は普通の人間そのものだ。君は一体、何なんだい？」

カエル顔の医者は真剣な顔を崩さない。対する八雲も膝の上に置いた手を固く握りしめ、体を小刻みに震わせながら苦虫をつぶしたような表情をしていた。

「……………小さい頃から……………コレのせいで周りから……………俺は拒絶されてた……………。……………どんな怪我をしてもすぐに治って……………それを見た奴らは……………化け物って……………！先生は信じられるか？たった数時間で刃物で切った傷が跡形もなく治ったり、骨折が一日やそこらで完治するなんてさ！！……………普通の人間に……………信じれるわけねえし、理解される訳もなかったんだよ……………。」

カエル顔の医者は内心しまったと思っただろう。興味本位で聞いたことが相手の心の傷になっているとは普通だったら思わないので仕方がないことだが、患者の古傷を広げてしまったら元も子もない。

「そのせいで辛い人生をすごしたんだね……………。すまない……………興味本位でこんなことを聞いてしまった。」

「別にいいですよ。これを聞かれて嘘の一つも吐けないような性格なんで、問題はありません。そんじゃあまあ、お世話になりました。また怪我でもしたら頼みますよ。」

「もう怪我をする前提なのかい？まったく、生きてここまで来れば助けてやる。だからまた来るといい。」

呆れたような表情を医者は浮かべたが、八雲はニツと笑って出て行った。

「しまった！彼に伝言があることをすっかり忘れていた。」

医者はデスクの上にある手紙を視界にとらえた。

「まあ、大丈夫だろう。あの子たちも心配しているみたいだしね。」

医者は口元に優しい笑みを浮かべながら窓の外。ちょうど入口あたりには佇んでいる男女を見ていた。

「さあて、初登校か。たあく、めんどくせえ約束しちまったもんだな。」

八雲はその場で軽く伸びをしてみる。そうしていると「八雲！」と彼の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「んあ？おお、ビリビリ！それに上条まで！どうしたんだよこんな所で？」

「バカ！あんたが大丈夫か見に来てあげたんじゃない。まあ、その様子だともう大丈夫みたいね。」

「え、なに？今は御坂さんのデレが発動中？」

「なっ……！！！！べ、別にっ！！あんたのことが心配なんじゃないよ……そのお……そう！！あんたとの勝負が心配だったのよ……！！！」

「どんな心配の仕方だよ！！まったく……。わりいな上条。お前にまで心配かけちまったみたいで。」

それまで二人の会話を傍観していた上条は苦笑いを浮かべていたようだったが、すぐに普通の表情に戻った。

「別にいいって。それよりお前の方が大変な目にあってんだしな。」

「それもそうか。んじゃまあ、学校行くか。この高校どこにあるかしらねえ？実は場所がわからねえんだよ。」

そう言つて八雲は携帯を開いて小萌から来ていたメールを見せる。すると上条は驚いた表情をした。

「ここ……俺の行つてる高校じゃねえか。」

「なんだとおおおおおおお！！！！！！」

「そんでまあ……。なんだ？この無駄な偶然は。」

「ちよつどよかつたじゃんか。しかも住んでる寮も同じなんてな。よく今まで会わなかつたよな。」

三人で登校を始めたが、八雲だけは未だに納得できないような表情を浮かべていた。だが、不登校だった人間が学校に行こうとして偶然、知り合つたばかりの人間とクラスメートだっただけでなく、同じ場所に住んでいたなんて話なんてそうそうあるわけがないので仕方ないだろうが。

「むしろなんであんならが今まで他人同士だったのか不思議なくらいよねえ。」

「まあ、俺は普通の人と生活サイクルが違うからな。」

「ふうん……。一体何やつてるんだか……。」

「さてね。」

ごましている様子もなく平然と語る八雲だが、もちろん他人には話すこともできない事をしているのだ。確認のために言うが、彼は学

園都市の暗部に深く関わっており、暗部の人間に狙われる立場にある。そんなことをほいほいと話してしまえば話した人間にさえ危害が及ぶ危険すらある。第一、八雲自身はそんなことは考えていないが……。

「なあ、八雲……。」

「ん？どうした？」

なぜか少し苛立ちまじりの声を発する上条だが、八雲はその異変には気付かないようで、あっけらかんとした返事をした。

美琴はその変化に気付いたようだが、その原因までは分かっていないようだ。

上条はそれでも拳をプルプル震わせていた。

「なんで……みんながこつちを見てるんだ……？しかも、主に女子が。」

「は？」

八雲と美琴は周囲を見渡してみる。確かに上条の言うように辺りの学生たちがこちらを見て何やら話しているようだった。主に女子学生が。

「一体なんなんだよ。なんか変なことしたか？」

「ああ、あんた……。自覚してないのね……。」

何かに気付いたように言葉を発し、呆れたような表情を浮かべる美琴だったが、それでも八雲だけは何が原因なのかまったく分かっていないようだった。

と、今まで黙っていた八雲が口を開いた。

「この……イケメンクソ野郎おおおおお！……！！」

「うおっ！ どうしたんだよ上条！？ まさか……誰かの攻撃を……？」

「そうじゃねえええええええええ！！ 敵って言ったら今はお前の方だ！ なんでお前はこんなにモテてるかってことだよ……！！」

「ぬあつ！？」

天然で返す八雲に上条の強烈なツッコミが入った。

周りにいる女性たちはほぼ全員八雲に目を奪われており、上条が嫉妬するのも無理ないだろう。

「てめっ……！ 何言つてやがる！？ 有名人のビリビリでも見てんじやねえのか！？」

「あ、あの……っ！ 連絡先、教えてください……っ！」

「え？ ああ、いいけど、なんで？」

「ほら！！ なんだ！？ 今の子は！？ 完全にお前の連絡先ゲットに来てたじゃねえか！！」

「よくあることだろ……！！」

「ねえよ……！！」

「八雲????????。あんだねえ????????!!!!」

「ああ！？ え……？」

八雲は美琴の方へ振り向くとその動きを止めた。理由は至極単純。八雲にとって恐怖の対象となる光景が目に入ったからだ。

美琴は体中から電気を発生させ、怒りに満ちた表情を浮かべていた。

「あ、あの……っ。」

「なあにホイホイと連絡先教えてんじゃこの女ったらしがあああ！！……！！」

「ぎゃああああああああああ！……………！！！！！！！！！！」

八雲はまたもや死ぬこととなった……………。

「だから死なねえっつもの！！」

「じゃあ、本当に殺してあげよつか？」

「いえ……………すいませんでした……………」

八雲は街のど真ん中で美琴に正座を強要され、しょぼんと打ちひしがれていた。上条は恐怖に顔をひきつらせながら直立不動で突っ立っていた。

「てか、聞かれたもんにはちゃんと答えるのが誠意ってやつだろ！  
？ 俺に非はないはずだ！！」

「なんですつてえ……………！！ はあ……………まあ、いいわ。このままじゃ  
学校に遅刻しちゃうし、今回だけは見逃してあげるから。」

「え？ マジで？」

八雲は左腕にしている腕時計に目をやる。そこには「8時28分」と表示されていた。

「うわっ！ 結構時間ねえじゃん！！ テストって確か50分開始  
だったよな！？ 早く行こうぜ！」

「確かにね。そんじゃあ、私はこっちだから。また無茶して怪我す  
んじやないわよ！！！」

「お前に一番やられてる気がするけど……………分かってるよ美琴。」

「えっ!？」

何気なく放った八雲の一言で美琴は一瞬驚きの表情を浮かべた。その様子を見た八雲と上条は理由が分からず顔を突き合わせた。

「どうしたんだよ美琴。」

「べ、別になんでもないわよ!! とにかく危険なことに関わらないこと! 分かった!？」

「? 分かったよ。」

「よし。じゃあね!」

少しうろたえた様子の美琴を見てさらに訳が分からなくなった表情を浮かべた八雲だったが、その疑問は解決されぬまま美琴は走り去ってしまった。

八雲は未だに顔を少し赤らめた美琴の表情の意味が分からなかった。

「なあ上条。あいつどうしたんだ？」

「さあな……。……このイケメンクソ野郎……。」

「まだ根に持ってたのかよ!!!？」

上条はものすごく恨めしそうなオーラを周囲に発散させつつトボトボと一人歩き始める。

「おい! なんでそんなに怒ってたんだよ?」

「鈍感なお前には一生分かんねえよ……。」

「鈍感? 俺のどこがだよ?」

「そーゆーとこ全部ひっくるめてだ!!」



「……………って、やべえ……………」  
「ん？どうした？」

ちょうど上条と八雲が教室に入ろうとした時、八雲が突然苦い顔をした。

「まったく勉強してねえなんだった……………」

「ああ、そういうことか。だったら任せろ！！ 上条さんが答案を見せてやる！！ …… って見せても仲良く補習になるだけなんだけどな……………」

「なんだ…………… 自虐かよ……………」

「「はあ……………」」

「おお！ かみやくん！ 何を朝からそんなところで打ちひしがれてるんぜよ。」

二人が教室の前で打ちひしがれていると金髪にサングラスをかけた少年が声をかけてきた。上条はうなだれていた頭を上げ、そちらに目を向けた。

「おお…………… 土御門か……………」

「朝からなあにそんなに絶望してるんですたい？ お？そっちはだれだにや〜？」

「ああ、こいつは……………」

「神凧八雲……………」

八雲はうなだれたまま自己紹介をする。もちろんその顔にはまったく覇気はない。まるで干からびたカエルのようにへにやへにやしていた。

どこかにそんなカエルのキャラクターがいた気がするが、ここでは置いておこう。

「おお！ 転入生か！ 俺は土御門元春。よろしくだにや〜。」

「転入っていうか…… 1学期に不登校だっただけなんだよ……。」

「おお〜、そーいうことだったんかにや〜。それでどうしてうなだれているんぜよ？」

土御門の言葉に八雲は一層肩を下す。今の彼の肩はハンガーのように下がっている。

「べ、勉強……してねえんだ……。」

「おお！それだったら大丈夫だにや〜！」

「え！？ マジで……！！？」

八雲は土御門の「大丈夫」という言葉に反応したが、彼は気づいていなかった……。誰も助けてやるとは言っていないかったことに……。

「マジだにや〜！！ これに補習組に一人追加だぜ……！！」

「てめえもか……！！！！？」

その時授業開始のチャイムが響き渡る。

学生にとって最大最悪のイベントが始まるうとしていた……。

「って、なんだよ。意外と簡単だったな。」

「マジかよ……。」

八雲の楽勝宣言に上条はぐったりうなだれる。テスト終了後の教室にはテストの出来に関してまったく正反対の八雲と上条。そして出来なかったにやゝ、とほざきつつも余裕たっぷりな土御門。最後に上条の悪友で、青い髪に耳にいくつもつけたピアスが特徴的な通称、青髪ピアスなど、様々な人が残っていた。

ちなみに上条、土御門、青髪はクラスのスバカ（デルタフォース）と呼ばれていることを八雲はまだ知らない……。

「まあ、かみやんやて何もバカになりたくてなってるわけやないもんなあ」

「あのかなあ青髪……。お前、そこはかとなくバカにしてるだろ……？」

「……………」

「バカにしてるよなあ！？　なんだその人を小ばかにしたような沈黙はあ！！」

青髪は顔をそらし、何もなかったかのような素振りをしていた。それに上条は発情期の猫か！？　と突っ込みたくなるほど、一人でわんわん、もといにゃんにゃん言っていた。

「まあ、落ち着けてかみやん。いつものことじゃねえの？」

「お前はいつから俺をかみやんと呼ぶようになった八雲お！！」

「…お前も俺を馬鹿にしてんのか？　バカにしてんのかー！！？」

「うん」

「ぐああああああああ！！！！　むかつくけど頭の出来が違いすぎて反論できねええええ！！」

頭を抱えて一人馬鹿みたいに絶叫する上条を八雲は苦笑いを浮かべながら見ていた。

『……………に來い……………』

その言葉を聞くまでは……………。

(この……………声は……………)

八雲の顔から笑顔が消えると彼はすつくと立ち上がった。  
一人でにやんにやん言っていた上条も反応して彼を見た。

「どうしたんだ八雲？」

「ああ。ちよつと用事を思い出してね。先に帰るよ、それじゃあ」

八雲はいつも彼に会う時と同じ澄ました笑顔を浮かべて教室を後にした。

学校の校門を抜けると、八雲は自身の能力を展開し、アウトランダー目的の場所に向かった。

場所は第七学区。

夕焼けの光を反射して真っ赤に染まった風力発電のプロペラが回る中、八雲は目的の場所のすぐ前に来ていた。

「いるんだろ？」

周囲を多くのビルに囲まれた路地の中、一人立ち止まった八雲は見えない誰かに言葉を贈った。

「ええ……………もちろん……………」

そしてそれに反応して路地の陰から一人の女子学生が姿を現した。その姿は今朝、八雲に声をかけてきた女学生だった。

「あの時はごめんね。朝から面白そうなことをやってたから」  
「ったく、お前のせいで美琴に殺される所だったんだぜ。御影冷夏。みかげれいか」

御影冷夏と呼ばれた少女は八雲と同じ年代のようだった。

透き通った青い腰まで届くロングストレートの髪に、季節に合わない薄手のマフラーをしていた。

名は体を表すといったようにクールビューティーを思わせる顔だちをしていた。

「……まあ、そんなことはどうでもいいが……案内してくれるか？  
冷夏。」

「ええ……。用意はいい？行くわよ、アレイスターの所に」

そうして二人は一瞬にして姿を消した。彼らのいた場所の正面には『窓のないビル』がそびえ立っていた。

中央に人間がまるごと入れそうなほど大きな容器が佇む薄暗い部屋の中。  
八雲はその容器と向かい合っていた。いや、正確には容器の中にいる人間と向き合っている。

「やあ、直接会うのは久しぶりだね八雲。」

「挨拶はいい。一体何の用だ統括理事長？いや……アレイスター」

クローリー……。」

八雲が対面している人物の名はアレイスター「クローリー」。学園都市のトップ……統括理事会のさらに上。つまりは学園都市の最も高い位にたつ統括理事長を務める人物である。

その彼はまるで男でありながら女に見え、その若者は少年のようであつて老人にも見えるような風貌をしていた。

そんな彼は培養液に満たされた容器の中で素敵な笑顔を浮かべた。

「僕にそんな態度をとれる人間なんて学園都市広しと言えども数えるほどしかないよ。まあ、今更気にはしないがね。5年前……あの忌まわしき惨劇が起こるまでずっと……僕の計画を後押ししてくれていた三雲博士の息子……。まるで自分の息子ように接してきた君ならね」

三雲　かつて超能力研究の著名な科学者であり、八雲の自慢の父親「だった」人物の名前。

三雲とアレイスターに直接的な繋がりがなければ八雲は今頃そこらを彷徨い、そしてのたれ死んでいたであろう……。

今の八雲の生活は彼の支えがあつてこそそのモノなのであつた。

「そうだな……あなたには感謝してる……。あなたの助けがなければ、今頃俺はこんな所で減らず口も叩けなかつたし、何より両親の仇の一人も殺せなかつた……。」

その言葉にアレイスターは内心疑問を抱いた。

「一人とは……他に黒幕がいると考えているのかい？」

「ああ、でないといつらがうちの一家を殺した意味が分かんねえし、何より……俺の勘がそう言つてんだ……。」

「……………」

八雲は悔しさとむなしさを混ぜたような表情を浮かべ、固く……まるで自分の拳が潰れてしまふんじゃないかというほどに拳を握った。

「……………分かった。君には今まで通り、更なる調査を許可しよう。」

「ありがとう。で、本題はなんだ？」

当然の疑問だった。

アレイスターが八雲を呼んだはずだったのに、いつのまにかただの世間話になっていた。

「ああ、久しぶりに君の顔が見たただけさ。来てくれて嬉しいよ。優しい優しい私の息子」

その言葉には何かドロツとした嫌な不快感を八雲は感じた。

そしてその泥が二、三日しないと取れない事にも彼は気づいた。

「……………用がないなら俺は帰る。じゃあ……………また」

八雲は内心早くこの場に満ちた不快感の中から逃れようと急いで歩き始めた。

だが、後ろからかかった 待ちたまえ、という声に心の中で舌打ちしながら振り向く。

「なんだよ……………」

「いや、大したことではないんだけどね。前々から聞いてみたかったんだ。あれだけ多くの人間を殺してきた感想を」

「……………チツ……………」

八雲は今度は心の中ではなく、実際にその口から舌打ちの音を漏らした。

アレイスターはそれでも最初に見せた素敵なきみを崩さない。

「言いたくなければいいんだが、父親である私にはそれを知る義務がある。……話してくれ」

それが父親の聞くことかよ、と八雲は心の中で冷たい声を漏らす。普通父親なら息子が何人もの人間を殺しているとしたら激しく怒り、勘当するだろう。そして捕まれば涙を流して会いに来てくれるだろう。

詰る所、八雲にしてみればアレイスターなど父親の皮を被った野次馬根性バツグンのオッサンだった。

「……………別に何も思わねえ。俺の目的を阻むものは全て壊す！  
全て拒絶する！！それが俺だ……………。罪悪感があるかどうか聞いてんなら答えはNOだ。俺はこの道を後悔していない……………。これは俺の道……………。明るい未来なんか期待しちゃいない……………。全部終わったらなんて後のことは後で考えるさ」

八雲は力強くそう言い放った。言い放った筈だったのだが……………気づけば先ほどよりも拳を強く握りしめ、血が出るほど強く唇を噛み締めていた。

彼はそれに気づくとそれを隠すようにアレイスターに背を向け、じやあなどだけ言い残してその場を去った。

その場に残されたアレイスターは一人。素敵な笑みを不敵な笑みに変え

「ふふつ……………」『天界の片翼を担う者よ』……………。君は、どんな主人公になるのかな」



八雲は外に出るために冷夏と合流した。

ちなみに冷夏は『窓のないビル』と外を繋ぐ門番を務めており、八雲の場合彼女の協力なしではここに立ち入ることすらできないのだ。

「悪いな、待たせちゃまって」

「ううん。いつものこと。ねえ、この後どこかに寄ってかない？  
久しぶりに会ったんだしたまには話でもしましょう」

クールビューティーな彼女はいつも自分の持つ雰囲気合った言葉使いをする。それでも久しぶりに会った幼馴染とプライベートで接するときは少しだけ口調が現代の女子学生らしいもの変わった。

「ああ。気分転換にもなるしな……。久しぶりに羽でも伸ばすかあ  
」！

そう言いながら大きな伸びをする八雲。

ビルの屋上を通る風が彼を撫ぜる。その姿は八雲自身だけでなく、見ていた冷夏をもすがすがしい気分させる程、

素敵だった……

意味（後書き）

八雲イケメン！！という話でした（笑）

『天界の片翼を担う者』（前書き）

短編ですし、あんまり文章の整理ができてない気もしますが、朝4時に書いたので（笑）

どうぞ〜

『天界の片翼を担う者』

神風八雲は薄情な人間だ

日常の中の彼なら目の前で困っている人間は救おうとするだろう。しかし……非日常の中だったら……？

彼は目の前で誰かが殺されそうになっても自分の危機に迷わず対処し、殺されそうな人間など無視するだろう……。

それは単なる気分の問題で、そこに絶対に助けてやる！！なんてヒーローっぽい考えなど微塵も存在しない……。

くどいようだが、神風八雲は薄情な人間だ

少なくともほんの二、三週間前までだったら

「じゃあ、今日は八雲のおごりね」

「……お前つてやつは……ったく、今回だけだぞ」

現在、アレイスターとの邂逅を終えた八雲と冷夏は近くのファミレスにいた。

理由は何か甘いものが食べたいという冷夏の要望があったからだ。

そしてそして、そんな彼女は注文を終えてから、カバンを覗き込みながらわざとらしく「財布忘れちゃった」というので、八雲はおこるはめになっていた。

「お前さあ、最初っからそのつもりだったろ？」

「全然！ 小さいことは気にしない！ 統括理事長から直接資金援助受けてるんだから」

「だからってなあ……」

八雲はさつきとは打って変わって明るい少女に変貌した冷夏を見て、それ以上何も言えなくなった。彼女は昔からこうで、特に仲良くもない人間　　とうか八雲以外にはいつものクールな対応しかなしくせに、彼といると何故かハツラツ少女へと変貌を遂げるのであった。

ちなみに八雲は自分を息子（八雲はものすごく嫌のだが）と呼んでくれるアレイスターの計らいもあってか、LEVELE5と呼ばれる人間たちと同程度の援助を受けられるようになっていた。

おかげで冷夏には（最近はなかったが）たかられまくっているのである。

「もうー。何一人でぶつくさ言ってるの？　ほら、ドリンクバー取りに行こう！」

「はいはい。」

呆れた様子で頭を掻く八雲だったが、表情を見る限りまんざらでもないようだった。

気だるげに立ち上がる仕草も何もかもが本人には気付かないが少しウキウキしているような感じだったからだ。

腰を上げ、ドリンクバーの所まで行くと冷夏は両手にコップを持って八雲を待っていた。

「八雲は何飲むの？」

「コーヒー」

その短い会話のすぐ後に冷夏は左手のコップにコーヒーを注ぎ始める。八雲が後からアイスがいいな、なんて言うと、すかさず氷も入れてくれた。

「お前は何か飲む？取ってやるから言えよ」

「えっ？ん〜、それじゃあ……野菜ジュース！」

八雲は彼女の手からコップを受け取ると目の前の機会に置き、野菜ジュースのボタンを押す。

傍目からは美男美女のカップルに見えてもおかしくないだろう。そのくらい二人はあまりにも自然に、一緒にいることが必然とでも言うかの如く、その場に存在していた。

近くの席にいる不良っぽい四人組が彼らを睨みつけていたが、二人は気にしない。

「ほら、シロップ」

「お、サンキュ」

二人はドリンクバーを取り終わると自分たちの席に戻る。

それと同時にジュウジュウと音を立てて、鉄板に乗せられたステーキがやってきた。

だが、それは八雲のモノではない……。彼の目の前に座るこんな真夏にマフラーをしている変人さんが頼んだものだ。

「お前……、さっき甘いもん食べたかったよなあ？　なんで！

こんな塩気たっぷりのアツアツな肉がこのテーブルに運ばれてくるんだ！？」

「いやー、ここまで来るのにお腹空いちゃって　ちなみに注文は八雲がトイレに行ってる間に取らせてもらいましたー」

「なんて奴だ……」

八雲ははあ、とため息をつきながらコーヒーに口をつける。ちなみに言うと彼は料理を頼んでいない。アレイスターに会った後は、気

持ち悪くて食事が喉を通らないからだ。

彼は口に含んだコーヒをゆっくりと、不快感を洗い流すかのよう  
に味わってから飲み込んだ。

「八雲って変わったね」

「ん？」

突然切り出された話に腑抜けた返事を返す。よく見ると彼女はす  
でにステーキを半分以上腹の中に収めていた。

「どうした突然？」

「なんか分かんないけど……今日久しぶりに会って思った。あなた  
は変わったって。前までは顔にはなかなか出さないくせに、どこか  
他人を寄せ付けない空気を纏ってた……。でも、今日はむしろ構っ  
てあげたくなくなっちゃって……。いつもならさ、勝手にやってるって言  
って全然笑ってくれなかったしさ……。五年前の八雲が戻ってきて  
くれたみたいで嬉しかったの」

なるほど、と彼は思った。

自分は変わったのか。

その事実が、その結果が……八雲の中に様々な感情を巡らせる。

いつも他人を拒絶していた自分。自分以外の全てを拒絶した『自分  
だけの現実』パーソナルリアリティ。

それがこの力の源だと思っていた。

アウトロウンダー  
変わった今でもこの力は生きている。いや、むしろその力は強くな  
っていると感じている。

でも、違うんだと分かった。  
多分、多分だけどそれは

パン！

思考を巡らせていた八雲の耳に乾いた音が届いた。  
闇の中で戦っていた彼にはすぐに何の音が分かった。

銃だ　　。

正面にいる冷夏を見ると、彼女はこくんと一回首を縦に振り、それを肯定する。

八雲は脇の窓ガラスに反射して見える敵の姿を伺った。

（五人か……。）

一人は銃を天井に向け威嚇射撃をした人間。他の四人は客の動向を見張り、変な動きをした人間を殺そうとギラギラ目を光らせていた。八雲は今すぐにでも能力を発動させようとするが、冷夏がそれを目で制す。

その時、先ほど威嚇射撃を行った男が、ガラガラとした声を上げた。

「てめえら、動こうとか考えんなよ……っ！　動いたら撃つっ。…  
…だから……黙って座っててくれよな」

意外にも男の声は震えていた。よく見ると全員が学生くらいの体格をしている。

八雲はそこで気づいた。

スキルアウト  
無法者だ

と。



スキルアウトは無能力者たちの集まりで、言うなれば不良、といった所である。

彼らは店の奥でどうやら金を回収しているらしく、見張りに立っているのは二人だけだった。

客は全員テーブルの下に入るように指示され、八雲たちも例外なくテーブルの下にいる。

(まったく、銀行強盗ならまだしも何ファミレスなんか襲ってんだよ)

学園都市では銀行強盗はよく聞くが、ファミレス強盗なんて微塵も聞いたことない。

どうせ、銀行は警備が厳しいからファミレス襲ったチキン野郎共かとバツサリと切り捨てた。

テーブルの上のチキンは微かにまだジューという音を立てていた。

「……………ねえ、どうする……………?」

「どうするって?やるに決まってるだろ」

「やるってあなた!? キャッツ!?!?」

突然八雲の視界から冷夏の姿が消える。

気づけば、いつの間に来たのか八雲たちの隠れていたテーブルの傍に男が立っていた。

「てめえ、何こそこ話してやがる!? 黙ってるって言ったろう

が!?! このくそ女ア<sup>ママ</sup>!?!」

「ウっ……………!」



それでも男は必死に自分の体に電気信号を送ろうとする。こいつを殺せと　　殺さなければ殺されるぞと

そして男の体は硬直から解かれた。

「ちつくしょおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

パンと乾いた音がバキンという音と共に店内に響き渡る。店内にいた客たちは皆目をそらした。

だが、聞こえた音は彼らの想像していたものとは違っていた。

「ぐぎゃあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

八雲の足元には血の海が広がっていた。よく見てみれば銃の破片らしきものが周囲に散らばり、それを持っていたはずの男の手は真っ赤に染まっていた。

声を聞きつけたのか、奥から男たちが飛び出してきた見張りを続けていた残った男と共に銃撃を八雲に浴びせる。

そして彼らも八雲の目の前にうづくまる男と同じ運命をたどった。

カランカラン

ファミレスの扉が開く音。

入ってきたのは茶色い髪をしたホスト+ヤンキーを2で割ったような風貌をした男

彼は一瞬の驚愕の後、薄く笑った。

その視線の先にあつたからだ。

あまりにも神々しく

あまりにも残酷で

あまりのも悲しそうな

どこまでも蒼い、ただ蒼い一枚だけの翼が

そんな中八雲は冷静に、あくまで冷徹に告げた

俺の大切なものを壊すなと

『天界の片翼を担う者』（後書き）

感想くれると嬉しいです!!!

てか、趣味で書いてるのに、禁書好きな人に悪いのかなあ………

立ち止まってるらない理由(ネタ)(前書き)

先の展開が思いつかな過ぎて書いてしまいましたー(焦)

八雲にキャラソンあったらこんな感じかなって思って作っちゃいま  
したよー(泣)。

何やってんだろ……………。

## 立ち止まっていられない理由（ネタ）

一歩踏み出すこと

それが怖いのなら

誰かに背中押してもらえ！！

夕闇の中で

吹き抜ける風に

後悔の涙を乗せて

START切つて

走り出せたら

どんなに楽しんだらう？

思い出すのは

闇を染める 赤いその過ち

気づいたら

何もかも見えなくなっていた

誰かのために

戦えたら それはどんなに素晴らしい？

そつと伸ばされた

君のその手を 拒んだ弱い心よ！！

得体のしれない

思いの渦に

拒絶反応示した

指してくる一筋の  
光の束が  
僕をこじ開けてく

思い浮かぶのは  
傍にいてくれた人の笑顔  
気づいたら  
僕はもう 一人ではなかった

君のために  
戦えたら 僕はただ嬉しい  
そっと伸ばされた  
君のその手を 掴んだ強い心よ!!

君のためだけに  
生きていけない 僕は全てを守る  
大切なもの  
そのすべてを ただただ  
守りたいその 真っ直ぐな心よ!!!!!!



## 過去、現在

罪を犯した天使はその羽を切り落とされる

それが最も残酷な方法で、最も苦しませるやり方だから

科学の街、学園都市のど真ん中に突如出現した青白い光を発する一枚羽の天使。

まるで片翼をもぎ取られたようなその姿は、それでも光を失うことなく、見たものを魅了し、抗う者をひれ伏せさせる程の、神々しさを放っていた。

「まったく、心配して損したよ」

病院へ向かう最短ルートであるスラム街のような街並みの中。

月の明かりだけを頼りに八雲は歩いていた。背中には方に傷を負った真夏にもマフラーをしている変人さんを担いで。

「ん？今変人さんって言わなかった？」

「？ 何のことだよ？」

「ううん。何でもない」

八雲は彼女の発言に首を傾げつつもゆっくりと荒れた地面を歩き続ける。

ひゆうと心地よい風が二人を撫でて通り過ぎる。やはりこうした所は、二人をお似合いのカップルに見せている。

八雲には背中に担いだ冷夏のこととは見えないが、彼女はもぞもぞと

八雲の背中マフラーに顔をうずめていた。

「寒い……」

「……お前って本当、昔から寒がりだけは直らないんだな。」

「……だって、寒いのは寒いんだもん……」

「俺はちよどいくらいだと思っただけだな」

いくら夜とは言っても今は真夏。実際夜でも熱いはずなのだが、彼女はマフラーに顔をうずめたままの恰好でいる。

撃たれた肩の傷には丁寧に包帯が巻かれ、制服の肩の部分だけが切られて露出していた。

「……肩が寒い……」

「はあ。我慢しろって。すぐに病院につくからそれまでな。」

「……うん」

その会話以降、二人の間にしばしの沈黙が訪れる。

またひゅと生ぬるい風が吹き抜ける。誰もいないスラム街のようになってしまう場所は明かりもない分、夜空の光をより一層際立たせ、街並みを幻想的に映し出していた。

「アレ、なんだったんだろうね？」

「さあな、俺にもよく分かんねえよ」

アレとはファミレスで八雲の背中に出現した青白い翼のことである。それを発現させた八雲自身にもなぜ、あの場でそれが出現したのか分かっていない。

それは自分が生き残るために他の命を奪う動物と同じようなもので、ただ本能的に出現したというしかない。下手すればもっと性質がわるいもののようなきもするが、結局彼自身にも何も分からなかった。

「あんならどうだっていいさ。どうせ俺が実は天使様でしたー、…  
…なんてオチがつく訳もねえし。なにせよお前が生きててくれて  
よかったよ。最初は、てつきり死んじまったと思っただもんな」  
「心配してくれたのは嬉しいけど、私が死ぬわけないでしょ。あな  
ただけ残して逝けるわけないじゃない… バカ…！」

冷夏の言葉が終わった時、八雲の背中に何か温かいものがこつんと  
当たった。彼は実際それがなんなのかすぐに分かったし、彼女がな  
ぜそうしたかったのかも分かった。  
理由はただそうしたかっただけ。彼女は自分の頭を八雲の背中に預  
けてみたかっただけ。  
いつも理由なんてそんなものだ。

「八雲の背中って暖かいね……。昔と、ちつとも変わってない。覚え  
てる？私、あなたの八歳の誕生日の時、寝坊しちゃって約束の時間  
に遅れちゃった時のこと」  
「そういえばそんなこともあったなあ。結局、俺は二時間待たされ  
たんだっけ」

八雲の苦笑と冷夏の苦笑いが重なった。互いに嫌な所しか覚えてな  
い、と言いつつ。それでも互いの言葉に嫌味は感じられない。

「その時、あなたを見つけてはしゃいじゃって… あなたの目の前  
で転んで」  
「確かにあったな。あれは慌てたよ。公園の砂場に転んで突っ込ん  
だもんな」

「…………… いらぬ所は思ひ出さなくていいから…………… でも、あの  
時。あなたが言ってくれた言葉は嬉しかったなあ。まさか二時間待  
たされてあんな風に言ってくれたことが意外だったしね」

「？ 何て言っただっけ？」

八雲が首を傾げると首に回された腕の力が強くなる。

一瞬。八雲は覚えていないことに怒って首を絞めようとしているんじゃないかと体を強張らせたが……、そうではなかった。

二人の体が密着して八雲の体にはより鮮明に彼女の体温が伝わる。

「……………あなたは『俺の誕生日に怪我してんじゃねえ！』一年に一度しかない記念日にお前が泣く顔なんて見たくないんだよ』ってさ……………。正直、怒られると思ってたからね。子供心にそれが鮮明に残ってるの」

「そっか……………。それで俺がお前を背負って帰っただもんな……………」

八雲はパツと空を見上げた。夜空に佇む月は八雲の背中に現れた翼に似て、青白い光を発していた。今なら届くような気がして彼はそつと空に手を伸ばす。

そこで彼は知る。空高く浮かぶ月を掴むためには、本物の翼が必要であることに。

街並みは寂れたビル群から昼間は人々の喧騒に包まれる幹線道路の歩道に変わっていた。と言っても夜になって完全下校時刻を過ぎていて病院近くの道となればたまに誰かとすれ違うだけで喧騒と呼べるものはもう存在していなかった。月の光を拒むように存在する街路樹は闇に不気味な影を落とす。

互いに無言となった二人は枝葉が風によって擦れ合う音に支配された空間の中病院の出入り口に着いた。

「本当にここでいいのか？」

「ええ。これ以上迷惑をかけられないし、学校だってあるんでしょ？早くあなたも休んだ方がいいと思うしね。」

冷夏は精一杯の笑顔でそう言った。

彼女は肩を撃ち抜かれており、その痛みは半端じゃなかったはずだ。それでも精一杯の笑顔でそう言った。

「それじゃ、バイバイ！」

彼女はそう言って病院に駆け込んでいく。八雲はそのあまりの速さにそれじゃあ、と声をかけることもできなかったが。

「強いな……」

八雲の顔に優しい笑みが浮かぶ。

彼の言葉が示す強いとは、痛みに耐えたことではない。痛みを耐え、病院に駆け込んでいったことではない。痛みの中でも他人に迷惑をかけたくないという心のことだ。

事実、彼女は痛みで大量の汗をかいていたし、隠そうとしていたが、たまに荒くなる息遣いも背負っていた八雲にはしっかりと伝わっていた。

「さて、帰るか。あーもうなんか無駄に濃厚な一日だったな」

彼は歩き疲れた再び地面に着け元来た道を引き返す。

と、そこで何故かよく見覚えのある制服に身を包んだ。茶髪の少女がコンビニから出てきたのを見つけた。

距離にして約10m。

八雲は今日はこれ以上の災難に合いたくはないと本能的に身構える。

(気づかれるか?)

逆側にビリビリこと御坂美琴は歩き始める。

(行く方向は同じ……。でも、途中で脇道に入れば……。！)

だが、避けようと思考を巡らせる彼の苦労は徒労で終わる。  
突然、歩き始めていた彼女が八雲のいる背後を振り返る。

(?!?!? なんで振り返るんだよ!?)

咄嗟に下を向いて私は何も関係ないですよオーラを醸し出そうとした八雲だったが、次の瞬間にはもうそんなことしなきゃよかったと後悔する。

「……なんであんたがこんな所にいるのよ?」

「!?!?!」

下を向いていた彼は、すぐ近くから聞こえた声に驚愕した。

「(なんでこんな近くにいらんだよ!?!?)ん? ああ! お前か!

! いや、ちよつと用事があつてさ。」

「……あんな怪しいオーラを出さなきゃいけない用事って何よお?  
まるで私は何も関係ないですよ、ってオーラを出してさあ」

「いやっ……!! あはは、は……」

美琴の暗い影が落ちる笑みに八雲はただ笑うしかなかった。  
同時に彼は動物のように本能的に思った。

災難に合うんだ、と

「あゝ、んゝ、たゝ、はゝ!!! そんなに私に会いたくないんか  
ああああああああ!!!」

彼女の方向に空気は震え、その発生源である『雷撃の槍』は一直線  
に八雲を貫いた。

「があつ!!!?」

八雲は天国へと旅に出たのだった

「天国には行けねえだろうし、勝手に殺すな」

八雲は何故か彼女の帰り道とは『違う方向へ』歩いているはずなの  
についてくる電撃ビリビリ少女を見た。

「なあ、なんでついてくんだよ? お前の帰り道ってあっちだろ?」  
「えっ?! ええ……っ。こっちの方が近道なのよ。実は」

ふうーん、と八雲は相槌を打つてみる。彼女の住む常盤台中学の寮  
って反対方向なんじゃないっけ?なんて思っても、彼女はそうよ、  
近道なのよ、と言い張っているし特に本人がそうしたいなら彼にそ  
れを止めようなんて意思は生まれなかった。

でも今はもう空が暗い青に支配され、かなり遅い時間であることが  
分かる。しかも八雲が歩いているのは寮に帰るための近道であるス

キルアウトたち不良が根城にでもしそうな荒れたビル群が作り出した狭い路地。

どう考えても常盤台中学のお嬢様が歩いていると違和感が浮き彫りになる絵だった。

「お前も物好きだな。普通だったらこんな道をこんな時間に女子中学生は歩かないぜ」

「そーいうあんたはどうなのよ？こんな場所をこんな時間に歩く人は普通じゃないと思うんだけど」

「お互い様って訳か」

少しの沈黙が訪れる。八雲にとってはなんてことないもの。でもこいつはどうなんだろう？と彼は隣を歩いている彼女に目を向けてみる。するとそこには俯いてなんだか気まずそうに肩をクネクネしている美琴がいた。

その様子に八雲はフツと小さな笑みを浮かべた。

「今なんで笑ったのよ」

その様子に気づいた彼女がムスツとした表情で八雲を見上げてくる。そしてとうとう彼は腹を抱えて笑い出してしまった。

それを見てこの電撃ビリビリ少女が黙っているわけもない。彼女は前髪からバチバチと青白い光を作り出していた。

「いやあ、悪い悪い。なんだか妹に仕草が似ててな。やんちゃなことかそっくりなんだよ」

楽しそうに語る八雲。思い出される昔の映像の中で彼の妹はまるで今の美琴のように体をクネクネして気まずさを緩和させようとして八雲にからかわれると怒ってポコポコ叩いてきた。

だが、彼はそれ以上思い出そうとはしなかった。



誰だつてつらい記憶は忘れたいから。それだけなのだから。少し暗い表情を浮かべそうになるのをグツとこらえた、笑顔を作る。意外に自然と出来るのだから不思議だ。と八雲は感じていた。

「へえー、あなたに妹なんていたんだ。妹さんも学園都市にいんの？」

「……いや、今は離れたところにいるんだ。遠くてなかなか会えないんだけどな」

彼は『自分にとって』優しい嘘を吐いた。

でも、辛かった真実を彼女に話した所でさらに気まずい雰囲気になるのは分かっていた。

数えきれないほどの人間を殺した彼がなんでそんな些細なことさえ回避しようとしたのか。それは彼自身にも分からなかったが八雲はポケットから煙草を取り出しその一本を咥え火をつけた。暗い闇の中で彼の顔だけが鮮明に映し出された。

ちなみにこの煙草、普通のものではない。

研究者の元息子である八雲が作り出したもので、学園都市の技術が使われており、彼は能力の制御のためにこれを煙草状にして持ち歩いているのだ。

並んで歩いている美琴はその様子を見て、なんかジト目で八雲を見ている。

「……なんだよ？」

「あなたねえ……。女の子と一緒にいるっていうのにそんなことしないでよ。そんなんじゃないわよ」

「……余計なお世話だ。お前だつてビリビリってやっててモテないくせに」

「なっ……!？」

顔を赤くして美琴はあんたよりはモテてるわよ！とかいう反論を始めた。八雲はそれはいはいといった様子で簡単にあしらっていたが、プライドの高い電撃ビリビリ少女はその行為にさらにヒートアップして、バチバチ言い始めた。

マズイ

そう悟った八雲は頭の中で彼女の機嫌を取る方法を検索し始める。そして

「あー、悪い。言い過ぎた！ お礼になんか好きなもの買ってやるよ！ 何がいい？」

「はあ？ あんた何……」

「いいから！ 食い物か？ アクセサリーか？ 失礼なこと言ったお詫びだ！ なんでもいいぞ」

「じゃあ……髪留め！」

「髪留めな。それじゃあ……」

八雲は腕時計に目を向ける時刻はすでに8時を回っていて、アクセサリーショップなどは開いていなそうだと、少し肩を落とした。

「悪いんだけどさ……週末でもいいか？ もう店やってなさそうだし」

「全然！ あんたが全部おごってくれるんなら！」

嬉しそうに笑顔をこぼす美琴を見て、なんだか嬉しくなる自分に八雲は気づいた。

多分、一緒にいて楽しいのだろうか、と彼は自問自答してみる。答えは簡単だった。

楽しいのだ

彼女の周りから始まった自分の日常がそれを保ってくれている彼女と一緒にいることが。でも、そこで八雲は彼女が先ほど放った言葉のトラップにかかっていたことに気付いた。

「ん？ 全部？」

「そ！ 全部！！」

「……………」

彼は黙り込んでしまった。マジで言ってるのかこの野郎とか思ったが、それも彼女だから言えるのかもしれないと前向きに頭の中で変換する。

そんなことも知らず美琴は既によっしゃー！！とガッツポーズをしていた。勝手について来てるくせにこいつは、と八雲は半ば本気で追い返してやろうかと考える。そしてすぐにもっと早くそうしておけばよかったと後悔することになった。

ザシュッ  
バタッ

？ 彼は一つ目の何かがコンクリートに擦られるような音で足を止めた。何か地面に倒れる音がして、ゆっくりと彼は音の方向に目を向けようとする。そこで一つの異常に気付いた。

美琴はどこだ？

今の今まで隣を悪態つきながら歩いてきた彼女の姿が隣になかった。そして考えられる可能性を八雲はいくつか一気に頭の中に挙げていく。そして最も可能性の高い解答を確かめるべく、音のした方に目を向けた。

そこには

美琴がいた。地面に突っ伏してまるで死んでるんじゃないかって思うほどにその肢体には力が込められていなかった。

「美琴っ！！！」

八雲はほんの数メートル先に突っ伏した彼女に向かって走り出した。歩数にしてわずかに二歩。そのうちの一步一步ですら彼には十分、一時間にすら感じられた。

彼は力強く一步目を踏み出す。そして二歩目。

彼は二歩目を踏み出さなかった。

だって彼は見たのだ。

彼女の背中に刻まれた

血塗られた赤い線を

「美………琴………？」

先ほど聞こえたコンクリートを擦るような音は、肉をえぐる音なのだ。唐突に理解した。

嘘だと信じたい。

夢だと信じたい。

幻覚を見ているのだと信じたい。

けれど

その華奢な背中に伸びた赤黒い線がこれは現実だと  
その華奢な肩がピクリとも動かない事実がこれが真実だと執拗に語  
りかけてきた。

時間にしてほんの5秒。

彼はその時間が永遠にすら匹敵するように感じた。

「だって……」

自分は今まで大勢の死を見てきた

「でも……」

今は目の前で少女が倒れているだけでこんなにも心臓が緊張感に負  
けてしまう。

「何で……」

こんなにもやるせなくなるのだろうか？

だって、さっきまで一緒に歩いてたんだぞ？

週末は一緒に買い物に行くってはいやいでたんだぞ？

なんで………？

彼は自分の目の前に広がる現実から目が離せなかった。

5年前と同じ。

また守れなかった。

力はあった。  
どんな攻撃すら防いでしまう拒絶の壁を手にした。  
なのに……

「俺は、また」

守れなかった。そう言う八雲の脳裏の映像と目の前のリアルがリンクする。

彼の体が小刻みに震え始めた。

絶望、恐怖、無力感。

そういったものが彼の中にあふれかえり、体の中を突き破ろうと暴れまわる。

だがその時、ピクンツ、と彼女の指が地面の上で動いた。

「…………ツ！ 美琴！！」

その動作が彼を思考の渦から引き戻した。

今にも発狂してしまいそうなほどの思考と負の渦の中からはい出した彼は

すぐに美琴の体を抱きかかえる。

まるで背中傷を塞ぐように彼女の背中に腕を回す。

思ったより傷は深くはないようだが、放っておいていい傷ではない。

「…………ごめん、八雲…………。私、また…………あんたの邪魔になっちゃうみたい、ね…………」

立てない体に鞭うつつように彼女の震える指先がある一点。  
ビルの屋上を指さした。

そこには

六枚の白い翼を持った天使が佇んでいた。

過去、現在（後書き）

今気づいた……。

諸説書くの下手過ぎ……。。



『天界の片鱗を振るう者』（前書き）

ちょっと間が空いてすいませんでした。

先のストーリーを考えている内にだんだんと日にちが立ってしまいました。

どうぞ

『天界の片鱗を振るう者』

美琴が震える指先で示す先。

そこには六枚の羽根を持った天使が佇む

まるで目の前に存在する片翼を切り落とされた天使に断罪を降すか  
月の光を覆い

冷酷に

あくまで神聖に

その悪魔のような天使は佇んでいた

「……………誰……………だ？」

絞り出すような八雲の声。

20メートルは離れているであろうその天使に聞こえるかどうかすら分からないほどに小さな声。

案の定、彼の声は聞こえていなかったのか。六枚羽の天使はゆっくりとビルの屋上から八雲たちのいる地面に降り立った。

「ははっ！ 面白いもん見つけたと思ったら。どうしたんだよ？ フ  
アミレスん時みたいにブチ切れてみるよ」

「……………フアミレス？」

八雲は思考を遡る。

目の前の男を見ている瞳は狂ってしまったようにその焦点を辺りに散らしていたが、それが一点に収束した。

「お前……強盗の時の」

そう。目の前にいる少年と比喻すべき天使は強盗と争っている時にこのこと現れた少年と同一だった。

だが、思考はそこで終わってしまう。

なんでこの少年は俺たちを狙うのか？

その答えは、交通渋滞に巻き込まれた車のように停滞した思考では導き出せなかった。

「何呆然としてんだ？俺は単純に羽出してみろって言ってんだよ」

「羽……？」

そういえばこの少年も羽を出している。

そして自分はその場で一度だけ翼を出現させた。

でも……

「それだけでこいつを傷つけたのか？」

「ああ、そうだよ。お前みたいな一般人があんな羽を出せるなんて明らかに異常なんだよ。理解できてるか？お前は明らかにこの学園都市においても異質な存在なんだよ。あの羽、お前にはどんなものに見えた？科学でも外の常識にも当てはまらないあんな非科学。<sup>オカルト</sup>もう分かんذار？ありや天使のそれだって」

目の前の少年はあっさりと縦にうなずいた。

同時に少年の言っていることにも訳が分からなくなる。<sup>オカルト</sup>

非科学。八雲は元は研究者の息子として生きてきた。それでもやはりこの学園都市において科学という常識的なものによって育まれ生きてきた。

だからこそ分らない。こんなものが非科学<sup>オカルト</sup>という存在によってあ

っさり言いきられることが。

「つつても、勝手に俺がそう思ってるだけで実は違うかもしんねえけどな。」

「……んなこと信じろつてのかわ？でも今はそんなことより、なんだつてこいつが傷つけられなきゃなんなかつたんだ!？」

八雲の思考は未だ停滞することを止めない。最もいきなり現れて目の前で知り合いを傷つけられて冷静さを保てるほどに彼はできた人間ではないのだから。

そしてそれでも湧き上がった疑問。こいつの目的は俺自身じゃないのか？という問いは目の前の少年があっさり「ああ」と肯定した。

「……なんででめえは直接俺を狙わなかつた？こいつはただの一般人だろ!!？それがなんでこんなに簡単で、あんまりにも幼稚な理由で背中ぶつた切られなきゃなんねえんだよ!!!」

「幼稚……ねえ」

なんだよ？と八雲は少年の言葉に疑問符を投げかけるが、少年の方は右手で頭を掻きながらゆっくり間を置いて

「もう一度同じ状況を作りたかつたんだよ」  
答えた。

「どういうことだ？そんなんじゃ答えになつてねえ!!なんでこいつを無闇に傷つけやがつたのかわ？つて聞いてんだよ!!!」

八雲の上手く回ってくれない思考の渦は少年の言葉をもつてしても答えをはじき出してくれない。

出来るだけ冷静にと務める彼も頭の中に生まれた停滞する思考の渦はなかなか止めることができなかつた。

「だからファミレスの時みてえにお前の『大切』を傷つけりゃあいいと思つてたんだよ」

まさか

八雲の中の渦が一つの論理に組みあがり、止まった。

「まさかてめえは」

俺の身近な人間を傷つけりゃあ俺が暴走してあの羽を出すんじゃないか、なんて思つてたのか！？

と言葉を発する前に答えは帰ってきていた。

「YESだ」

と。

「つまり何か？俺がああ何んてコメルヘンな羽を出したせいで美琴は……何にも罪のないこいつは！ 傷つけられたつてののか？ 俺が誰かの犠牲によってブチ切れなきゃあ羽みたいなのが出現しないつてのが分かつてたから」

「……まあそうだな。俺は単にてめえのその力に興味がある。それをもう一回発動させようと思えるなら同じような状況を作り出すのがベストの選択だろ？」

停滞していた八雲の思考は一つの答えのもとに回り始める。

少年の肯定に言葉に、八雲の中で何かがピシリと音を立てて弾けた。てことはあれか。こいつは俺のせいでこんな血まみれにされて、そんな興味本位で羽が見たいからブチ切れてみるなんてガキみたいな理屈で

美琴は傷つけられたのか？

だったら……

だったら……

だったら……！！

ゼンプ、オレノセイダ

！！

轟！！ という音が空を四角く切り取る荒れ果てたビル群を鳴らし、その慟哭はまるで天が泣くかの如く暗い青に支配された空へと広がっていく。

学園都市を覆い尽くすほどの慟哭は、周囲の廃ビルをいくつかなぎ倒すと、止まった

そしてその衝撃に目を瞑っていた少年はゆっくりと目を開けて見た。

目の前に降り立つ、少女の体を抱きかかえた一枚羽の天使を……

「……………す……！！」

次の瞬間、何が起きたかも分からないまま少年は空へと撃ち飛ばさ

れた。

「……………っ！！？」

少年は何が起きたのかも分からないままに全身を理解不能の衝撃に包み込まれ、声も出せずに吹き飛んでいく。

それでも彼は空中で態勢を立て直し、一枚羽の天使を見下ろす。

ニイツと微笑むその口からは一筋の赤い液体を流していた。

「……………八……………雲……………？」

美琴は一枚羽の天使に抱きかかえられながらもその顔をしっかりと見ていた。

瞳には何の感情も映し出されてはいないのに、それでもはつきりとした威厳と怒りを湛えたその瞳。

背中には一枚の青白く光る羽を広げたその見知った顔を。

彼女は朦朧とする意識の中でもはつきりと、見た。

瞬間、轟！！という音が再び周辺に響き渡った。

地面を撫ぜる烈風が激しい土煙を巻き上げ、遠ざかっていく。

「飛ん……………でる？」

彼女を抱えた天使は空を舞っていた。

背中に生えた羽をはばたくこともなく。それでも辺り一面に風をまき散らしながら、夜空を闊歩する。

そして同じく空を漂う少年の間の前にその姿を現した。

「……………お前は許す訳にはいかない」

一枚羽の天使は六枚羽の天使に向かって静かに告げる。

対する六枚羽の天使は先ほど浮かべたその笑みを崩すことはなかった。

「そうだよ。それでいいんだ。……んじゃあ、本気で行かせてもら  
うぜー!!」

その言葉を皮切りに二匹の天使は夜空でぶつかり合う。

二人が放った攻撃は空中でぶつかり合い霧散し、周囲に膨大な衝撃  
を撒き散らす。

そんな中八雲の腕の中に抱えられたままの美琴は何の衝撃も感じず  
に、彼の腕の温かさだけが伝わってくる。

(……守って……くれてる?)

最初は何故八雲が自分を抱えたまま戦いを始めたのか彼女には分か  
らなかった。戦闘の真つただ中では自分は足手まといの存在のはず  
手負いの人間を抱えたまま戦えばそれは大きなハンデになるはずだ  
った。それでもそんな可能性を持ったまま戦地に赴く理由はそれし  
かなかった。

そしてそれを裏付けるように先ほどまで美琴たちもいた場所は何度  
も激しい攻防を繰り返す二人の攻撃の余波によってほぼ荒地と表現  
してもいいほどに原型をとどめてはいなかった。

(そういうことか……)

飛んでくる攻撃を防いだり、反撃を繰り出していく八雲の腕の中で  
彼女はホツとしていた。

異形のモノへと変わってしまった彼が自分のことを気にかけてくれ  
る人間らしさをしっかりと持っていることに。

(……よか……った……)



八雲の能力やなぜ天使のような羽が彼の背中から生えているのかと聞きたいことはまだまだあったはずだった。それでも彼女は自分も意識しないうちに芽生えていた不安を心の中から打ち消して。そのまま八雲の腕の中で彼女は眠るように意識を手放した。

「っは！ なかなかやるじゃねえか。なら、こいつはどうだ？」

六枚の羽根を飛ばたかせる少年は戦況を打破するための行動に移る。お互いが真正面からぶつかりあっても力はほぼ互角。先ほどから翼による斬撃や八雲にとっては正体不明の多方向からの攻撃すら八雲の周りに張られたバリアのようなモノによって防がれ続けている。しかし、

「光は防げねえだろ？」

少年は八雲と青白く光る月の直線上に立つ。

そして

その翼が開かれた瞬間、八雲目がけて無数ともいえる光線が降り注ぐ。

しかしそれは、レーザーといったたぐいのものではない。あくまで月明かりが少し明るくなった程度の放射光線。普通の人間だったら別に気にも留めずにスルーしてしまうようなモノ。

あくまで、普通の人間ならば

「チツ…！」

しかし、八雲はそんな普通の人間なら感知できないようなものに易々と当たってしまうほど優しくはない。しかも今は美琴という人間を抱えているのだ。

そんななんでもない光にそれらしい台詞をセットで投げつけられた

ら、回避に移るだろう。

八雲の体には月の光が当たっており、それに気を使って能力など使っているはずもない。そんな時にあんな光に真っ正面から当たるほど馬鹿ではない彼は回避に移ったのだ。しかし運悪くその光が八雲の右足を掠めた。

「があっ!!！」

八雲の足を掠めた光は掠めただけでも関わらず、彼の足に深い切り傷を刻んだ。

痛みに顔を歪めながらも彼は油断などしない。嫌な汗が浮かんだ体で真正面から少年を見据えた。

「ツツ…！ 何しやがった…!!？」

顔に苦痛を浮かべた八雲とは対照的に余裕そうな笑みを湛えた少年はまるで獲物を追い詰めた獣のように犬歯をむき出しにしながら

「これが俺の能力。『ダークマター未元物質』だ。そこで、俺のダークマター未元物質に常識は通用しねえからよく覚えとけ」

言った。

「ダークマター未元物質…だと？」

八雲はそれを聞いて痛みにゆがんだ表情を一気に驚愕の表情に変えた。

なぜならその少年は

「俺が学園都市に7人しかいないLEVEL5の第2位。垣根帝督だ」

未だに犬歯を剥き出しにした笑みを浮かべたまま、垣根帝督と名乗った少年はまるで自分はお前よりも上の存在だと言わんばかりに、まるで嬉しいことがあった時に鼻歌でも歌うように言った。

## LEVEL 5

それは学園都市に7人しかいない超能力者たち。

そして学園都市180万人の学生のまさに頂点である。

そしてその第2位ともなれば、まさに学園都市の学生たちの中でも2番目に強いということになる。

LEVEL 5の序列は研究価値の高い能力の持ち主ほど上位になってくるが、ほぼその実力を現しているということを八雲は知っている。

LEVEL 5の超能力者たちが一人で軍隊と戦えるような化け物だということも。

そんな人間と真つ向から敵対しようとするならば普通の人間ならば一目散に逃げに徹するだろう。

そう。あくまで普通の人間ならばだ。

「だから……どうした？」

ああ？と垣根帝督はその反応を意外そうに受け取った。

学園都市のLEVEL 5、軍隊と一人で戦える化け物だから

「だからなんだってんだ？」

八雲は足の痛みなど忘れてしまったかのように、悠然と。そんなことは自慢にもならないと言いたげな瞳で厳然と。そんなものでは自分が退く理由にはならないと自然に

「俺の前に立ちほだかるんなら……そんな幼稚な考えごと、てめえを拒絶する」

言った。

「てめえ、よつぽど愉快な死体になりてえようだな。…死ぬ覚悟は出来てるか？」

垣根帝督は引きつった笑みを浮かべて、明らかに殺気の籠った声を放った。

しばし、両者の間に沈黙が訪れる。だが、その沈黙を破ったのはどちらかが仕掛けた音ではなく。どちらかが発した声でもなかった。

ピリリリリリ

はあ？

八雲は垣根帝督のポケットの中から聞こえてきた間の抜けたアラーム音に、間の抜けた声で返した。

対する垣根帝督は敵が目の前にいるというのに携帯を取り出して慣れた手つきでアラーム音を切った。そして

「わりい。時間だ」

「はあ!?!」

さつきとは打って変わって殺気のまったく籠っていないまるで友達にでも告げるかのような声で垣根帝督は片手を上げた。今までのピリピリした空気はどこへやら、彼は携帯と共に戦う意思をしまつてしまったようだ。

「どういふことだよ!? なんだ!? このユルツユルの空気は!? お前は一体何がしたかったんだ!?」

「いや、だから時間だつて。お前が抱えてる女の子の体力的にさ」

そこで八雲はハツとして自分が抱えている美琴を見ている。いつの間にか意識を手放し眠るように気絶していた。

「ちなみに出血は『傷口を自動修復する物質』で塞いどいたから、安心しろ」

「なんだつて? ここまでやっておいて自分で傷つけた女の子を治しただと? お前は本当に何がしたかったんだ!?」

八雲にとっては当然の疑問だつた。いきなり襲つてきて襲つた相手の傷口を舐めるような真似は本気で狩りをする猛獣はいない。つまり……

垣根帝督は『本気で狩りに来たわけではない』というのかもしれない。

だとしたらゾツとする話だ。本気でない相手に互角、それで本気なんて出されたら間違いなく押されてしまう。下手すれば死。

己が死ぬかもしれないという現実にたどり着いた八雲。それでも彼に臆した態度や恐れを感じている素振りは見えなかった。

それほど揺るがぬ自信。彼はそれを頼りに生きてきたのだから。

「まあ、単純に俺の興味だったけどよ。そんなことで表の世界に生きてる女の子を殺すなんてしたくねえしな」

頭を掻きながら殺したくなかったという垣根帝督に対し、こいつ何気に悪い奴じゃないのかと八雲は頭の中で呟いた。

「表に生きている…ねえ。まるで自分は裏の世界の住人みたいなことを言うじゃねえか」

「……………まあ、そこは勝手に考えてくれ。悪かったな、俺の遊びにつき合わせちまって」

八雲は小さく舌打ちする。

遊び、と言い放った垣根帝督。こんな風に人間を傷つけておきながら……………、と八雲はさも気に入らない様子でその場を離れた。

八雲の胸に刺さった小さな棘。それは彼を苦しめるのか、それとも彼の生きる目的になるのか。

それはまだ、誰にも分からないだろう



『天界の片鱗を振るう者』（後書き）

見ていたただけなら、感想ください!!

書くモチベーションを上げるのにもなりますし、何より嬉しいので  
!!（笑）



## UNKNOWN (前書き)

投稿がまた遅くなってしまいました！

続きは次に回そうかどうかどうしようか悩んで結局次に回すことにしました。  
短いですがどうぞ。

## UNKNOWN

時刻は午前0時過ぎ

病院の廊下はある一点を除いてすでに消灯され、暗闇がぼっかりと口を開けていた。

その後、八雲は美琴を急いで病院まで運んで行った。幸い、彼女の傷口からはすでに出血しておらず、傷口を縫い合わせておけばすぐにも退院できるそうだ。

八雲はその話を病院特有の白い廊下に置かれたベンチに腰掛けながら聞いていた。

「しかし、君は災難の避雷針にでもなっているのかな？ まさか三日連続でうちの病院に顔を出す人なんて数えられるくらいしかないよ」

「……………すみません。いつもお世話になってばかりだ。」

カエル顔の医者らはふむう、と一息つくと、再び目の前の深刻な顔をした少年に言葉をかける。

「大丈夫。僕の仕事は患者の命を救うことだからね。そして、あの子は僕の患者だ。途中で投げ出したりはしないよ。明日の朝にも来なさい。元気なあの子の顔が見れるだろうさ」

「……………はい」

八雲は疲れ切ったような声で返事をした。その姿にはいつものよう

な力強さはなく。人生に疲れ切った老人のようにその場に佇んでいた。ゆっくりと立ち上がった八雲はそのまま何かから逃れるようにその場を後にした。

突き当りの廊下を曲がり、階段を降り、そして一階までたんとしたテンポで機械のように降りていく。長い廊下を抜けて病院を出ようとした彼の背中に女の子特有の高い声音が突き刺さった。

八雲、と声をかけられ、彼は止まった。振り返ることはしなかったが、きつと彼には今の声が冷夏のモノだと気付いているはずだ。再びちよつと待ってよ、と声がかかる。

しかし、それでも八雲は振り返らなかった。正確には振り返ろうともしなかった。

そんな八雲の様子も暗闇に支配された病院内では冷夏に伝わらない。夕方頃、八雲と一緒にいた時の様子とまったく変わらない態度で彼女は八雲のすぐそばまでやってきた。

「なんであなたがこんな所にいるの？まさか、私のことが心配で戻ってきてくれた？」

満面の笑みで微笑む冷夏。しかし、八雲はその言葉が聞こえていない様子で未だに振り返ろうとしなかった。

そんな様子の八雲を見て、ようやく何かがあったことを悟った彼女は、疑問符を抱きながらも心配そうな声を出した。

「ねえ、…どうかしたの？なんか元気ないじゃない」

「……………いや、なんでもない」

ようやく声を発した八雲。悟られまいと出したであろうその声は、

それでも少し震えていて、それすら隠そうとする声色は逆に平坦な印象を彼女に与えた。

「ねえ、…本当に大丈夫？なんか…辛そうだよ？」

「…ああ、平気だよ。それより一つ頼まれてくれないか？明日の朝、時間があればいいんだけど。ここに御坂美琴って子が入院してるんだ。その子にこれを渡しといてくれないか？あのカエル顔の医者にこれを渡したら自分で渡せばいいじゃないかって突っぱねられてさ」

明らかに言いくるめようとする八雲の声にはどこか必死に何かと戦っているような緊迫感があった。

そしてその『何か』が冷夏には分からない。そう頭では理解していても分からないという事実が彼女の心を締め付ける。

八雲の力になれないというその事実が。

幼いころから一緒にいるというのに、今の八雲のことを全く理解してあげることが彼女は出来なくてそれが何故か悔しかった。

ポケットから一枚の便箋を取り出してようやく彼は冷夏の方へと顔を見せた。

暗闇でよく見えないが、それでも彼女には彼がこんなにも弱った表情で笑っているのが痛々しくて見ていられずに目を落とす。

それでも八雲は気にせずに取り出した便箋を無理やり彼女の手に握らせた。

「お前なら心配ないと思うけど、その中見るなよ。……………それじゃ」

そして彼は病院の自動ドアを抜けて、暗い夜の中を一人走り始めた。胸に刺さった棘を振り落とそうと全力で…。

一人取り残された冷夏は、八雲の最後の言葉を心の中で反芻していた。彼は本当はその手紙を『見てほしい』と言っているような気がして、彼女は便箋の封を破かないように慎重に開けて中身を広げた。

「えっ?…これって!？」

暗い帳で閉ざされた夜はそうしてまた明け行く朝を待っている。その中で、それぞれの長い一日は終わりを迎えて行った。

翌日の放課後、冷夏は第七学区にあるとあるオープンカフェである人物を待っていた。

それはとある人物に昨日の顛末を聞くためである。

彼女が座るのは道路沿いに面した店の屋根がない席で、屋根の代わりにテーブルの真ん中に開いた穴から赤白二色の色彩に彩られたパラスルによって夏の暑い日差しを遮っていた。

しかし、その席に座る少女は夏という季節とは思えない服装をしていて、首には薄手だがマフラーを巻いていて、それで涼しい顔でカップに注がれたアイスティーを飲んでいた。

そんな彼女のいる席に近づく人影があった。その人影はどこか澄み渡る空とは不似合いなどか重い足取りでゆっくりと近づいて行った。

「…冷夏さん。」

その人影は常盤台中学の制服を着ていて、そんなお嬢様学校に通っているとは思えないほどはきはきした少女であるのに、そんな素振りには影を潜め、表情に影を落としていた。

「ごめんなさい。突然呼び出したりして。まあ、座って。ちょっと長話になると思うから」

促されるまま美琴は怜香とは反対側の席に座った。ウェイトレスがやってきて営業用のスマイルを浮かべて注文を聞いてきた。

わざとらしい笑顔を浮かべる店員の素振りには気も留めず、冷夏のアイスティーが目に入ったので同じものを彼女も注文した。

注文をとって満足した店員はさらにニコニコした笑みを浮かべて店内に戻っていった。

店員が去った後の二人の間には、気まずい沈黙が訪れる。

それは二人が今朝、知り合ったばかりだからか、それとも八雲という一人の間人を心配して深刻な話になるのではないかという空気がそうさせているのか。

おそらく後者が正解であり、そしてそれがこの場における正答。二人の間には見えない空間が果てしのない距離になって横たわっている。

「どうしたのよ？ そんな力チカチになって。私ってそんな怖いお姉さんに見えるかしら？」

ニコツと冷夏は冗談めいた口調で微笑んだ。それで少し気が緩んだのか美琴もお嬢様らしい笑みを浮かべる。常盤台中学という日本でも五指に入るお嬢様学校に通いながらも、学校指定のブリーツスカートの下にはいつも紺色の短パンを履いているようなお嬢様らしからぬ行動が目立つ美琴がだ。

でも、その笑みは決して作ったものではなく、どうにか笑顔を作ろうとしたら勝手になったような笑みだった。

「そんな、とんでもない。冷夏さんが怖かったら家の寮の教官なん

てもう怖いじゃ済みませんよ」

それでも美琴は冗談に軽口で返した。その言葉は体の奥深くから必死で絞り出された声、というよりはこちらもつい勝手に口が動いていたようなものだった。

「フフフツ、美琴ちゃんも大変みたいね。私はそんな学園都市のLEVEL5にすら怖がられてるような人には会いたくないなあ」

冷夏は眩しいと表現するのが適切な表情で笑った。見たく落ち込んでいる美琴を励まそうとかこの空気をどうにかしたいとか、そういうことは微塵も考えてはいなさそうなほど自然な笑顔だった。でも、その笑みは効果靦面だったようで美琴の表情にも余裕が生まれた。やはり初対面だということも少しは関係していたようだ。

「たしかに。私もあの人の前じゃ逆らえないんですよ。怖くて何もできなくなっちゃって」

照れた笑顔で美琴は言った。対面に座る冷夏もその顔を見て、さらに笑みが強くなる。

歩道に等間隔に植えられた街路樹の影が風に揺れて木漏れ日が歩道をちらちらと行きかっていた。

夏らしい爽やかな風が道行く人たちを縫って進んでいく。二人の間にあつた空気を固まらせていた氷塊は風に当てられてみるみる溶けていくアイスのように溶けて消えた。

夏の午後のオープンカフェ。その歩道寄りに位置する席には二人の女の子が仲良さそうに座って談笑していた。

## 第七学区の裏路地。

立ち並ぶビルを区切る細い道の真ん中を彼は歩く。道の真ん中と言ってもビルとビルの間隔はほんの2、3メートルといったところだろうか。学園都市は多くのビルが立ち並ぶ近代都市であるためか建物と建物の間が狭くなっている場所がかなり多い。

そんな建物たちに四角く切り取られた空はまだ青く、さんさんと太陽光が煌めいていた。どこぞのウニ頭だったら太陽のバカやるー！とか叫びそうなほどに紫外線を振りまいているが、路地裏は建物の陰になっており、直射日光が当たることにはなかった。

ジメジメと湿気が一か所に溜まっているような不快感が全身に纏わりつく。陰鬱なほの暗い道の真ん中で、彼は一人棒立ちになっていた。

そんな彼の周りにはもぞもぞと何かが動いていた。それは人間の手足、頭。数人の学生らしき男たちが倒れていた。

彼らはスキルアウト。学園都市に住むLEVEL0の学生たちが構成する。簡単に言えば落ちこぼれ集団。制服を着ている所を見ると彼らは『学校に行きながらも活動する』部類らしい。彼らに目立つた外傷はないが、うめき声をあげている点や、腹を抱えている点を見てわかるとおり、素手でポコポコにされている。

彼らが路地裏を一人で歩いている八雲に絡んで返り討ちにされた様子がありありと脳裏に浮かぶ程分かりやすい構図だった。

それを成し遂げた当の本人は俯いたままでもたゆつくり歩き始めた。

なんで守れなかったかなあ

昨日の出来事が頭の中にフラッシュバックする。体が異様に熱かった、呼吸が異常に辛かった、心臓がやけに早かった。



昨日のことは細部まで思い出せないが、映像が猛スピードで流れて行ってあっという間に元の世界が脳を支配する。

彼は歩みを止めた。

「……………何やってんだろうな俺は」

神凧八雲は自問自答する。まるでふてくされた子供の様に、だだをこねる三歳児の様に。

彼は一人。暗い路地裏で呟く。

答えが返ってくるわけない。分かっているながらもあえて問う。勝手に彼女の前から逃げたのは自分だと頭では分かっていた。きつと彼女は自分が無事だとその目で確認すればよかったと言ってくれはすずだ。

だから。

神凧八雲は自分が許せなかった。何人もの人間の未来を奪って、いくつもの涙を生んで、ほんの少しの幸せを手にしようとしている自分が。

視線を上に向けてみる。もちろん夏のきれいな青空が広がっていた。この空の下に自分は出ていけるのだろうか？この空の下で自分はそれだけの幸せを奪ったのだろうか？

神凧八雲は再び自問をする。

でも、やはり答えは返ってくるわけもないが。

「俺に…居場所なんてものがあんのかな…」

小さく腹から出したわけでもない声。聞こえているのは精々自分と自分の背後でうめき声をあげているスキルアウト達だけだろう。

でも。

けれど。

その声に反応する声が一つだけあった。

「…ありますよ。とミサカはあなたの問いに返答します」

その声はこの場所にはあまりに不釣り合いで。

その声はあまりにも可愛らしい声であるはずなのに。

その声には一切の感情が込められていなかった。

八雲はその声の聞こえる方へ視線を移す。そしてその表情には驚愕の色が浮かんだ。

なぜなら、その少女は濃いクリーム色のブラウスと紺のプリーツスカートを身にまとい、肩の所で切りそろえられた茶髪。

そう。

御坂美琴が彼の目の前に立っていた。

「…美琴…？」

八雲はその光景に身震いする。今一番会いたくない人物が目の前にいるだけでも自分の体は激しく動揺している。それだけならまだマシだった。

目の前にいる御坂美琴は、確かに外見こそまったく同じだが、冷たい空気を纏っていた。

いや、それは間違いかもしれない。なぜなら、彼女の瞳はしっかりと人間の目の働きをしているようだったが、まるで何も映し出さない鏡のようだった。

それを八雲は自分への侮蔑、あるいは落胆、またはそれ以外の負の感情を映し出しているように感じて今にも呼吸が止まりそうになる。彼女が自分を恨んでいるんじゃないかと。

実際、そうなっている可能性も考えて御坂美琴の前に行くのが彼は怖かった。

だから。

目の前にいる何も映し出さない彼女が怖かった。

「はい。とミサカは首を縦に振ります。私は御坂美琴お姉さまの遺伝子を元に作り出された量産軍用クローン。『妹たち』<sup>シスターズ</sup>です。と懇切丁寧に説明します」

「……量産、軍用…？ それにクローンだと？」

八雲にはそれが信じられなかった。

目の前にいる彼女はまさしく御坂美琴であり、唯一違うところを上げるとすればゴツイ軍用ゴーグルをつけているぐらいしか上げるところがない。

でも、それが本当だとして。

何故彼女が自分の目の前にいる？

なんで美琴はそんな人間の命を弄ぶ実験に協力しているんだ？

その疑問が潰されたレモンのように彼の頭にジワジワと染み込んでくる。

「はい。私たちはLEVEL5量産計画『<sup>レディオノイズ</sup>欠陥電気計画』によって作り出された個体です。とミサカは答えます。今回はあなたに新しい実験に協力していただくために説得に来ました。とミサカは単刀直入に話を切り出します」

「『<sup>レディオノイズ</sup>欠陥電気計画』？ 新しい実験？ お前は…何を言ってるんだ？ 訳分かんねえよ。なんで、そんな…」

体が震える。

彼の頭の中は混乱によって思考が定まらなくなっていた。なんで自分にそんなことを頼みにやってきたのか？それ以前になんでこの実験で御坂美琴の名前が出てくるのか。

分からない。

彼には何一つとして分からない。

「では、あなたに余計な情報を与えるなど命令を受けているので、とミサカはあなたに適切な処置を施します」

八雲の背後からさらに同じような声が聞こえた。

彼は振り向こうとして、その意識を手放した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6690w/>

---

とある科学の拒絶反応（アウトラウンダ）

2011年10月26日12時04分発行